

アフガニスタン女子教育支援15周年記念公開シンポジウム

アフガニスタン女子教育…支援の歩みと現状

アフガニスタン女子教育支援15周年記念公開シンポジウム
アフガニスタン女子教育…支援の歩みと現状

日時…2017年11月29日 15時～17時30分

場所…共通講義棟2号館201室

主催…国立大学法人お茶の水女子大学

後援…文部科学省



目次

開会挨拶

室伏きみ子（お茶の水女子大学長）

4

来賓挨拶

バシル・モハバット（駐日アフガニスタン・イスラム共和国特命全權大使）

8

遠山敦子（元文部科学大臣、お茶の水女子大学名誉博士）

12

池原充洋（文部科学省大臣官房文部科学戦略官）

15

萱島信子（独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所副所長）

17

高橋裕子（津田塾大学学長）

20

小野祥子（東京女子大学学長）

22

今岡春樹（奈良女子大学長）

24

大場昌子（日本女子大学学長代行）

26

基調講演

「山と山は歩み寄らないが、人と人は歩み寄れる」

29

「アフガニスタン女子教育支援と平和達成への尽力」

井上正幸（元文部科学省国際統括官（公財）日本国際教育支援協会理事長）

31

特別講演

「男女7才にして席を同じゅうせず

「アフガン社会における女子教育の現状と提言」

高橋 博史（外務省参与・大使、前駐アフガニスタン・イスラム共和国

特命全権大使）

「アフガニスタン女子教育の実際」

アフガニスタン・イスラム共和国女子留学生プレゼンテーション

卒業生ビデオメッセージ

ファシリテーター 青木 健太（お茶の水女子大学グローバル協力

センター特任講師）

「アフガニスタン女子教育支援の15年間」

室伏 きみ子（お茶の水女子大学長）

閉会挨拶

広瀬 晴子（お茶の水女子大学理事）

室伏 きみ子 氏

お茶の水女子大学長



皆様こんにちは。お茶の水女子大学長の室伏でございます。

本日は、アフガニスタン女子教育支援15周年記念公開シンポジウム「アフガニスタン女子教育…支援の歩みと現状」にお運びくださいます。誠に有難うございます。ご多用中にもかかわらず、ご臨席を賜りました御来賓の皆様にも心から御礼申し上げます。

本学が、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学と共にコンソーシアムを結成し、アフガニスタン女子教育支援を開始してから今年15周年を迎えました。今振り返ってみますと、15年という年月は、あつという間だったなとも思いますし、長かったなという気もいたします。この間に、社会環境やアフガニスタンの情勢が大きく変わり、その影響を受けて、私どもの活動も幾多の紆余曲折がありました。しかしながら、五女子大学コンソーシアムの皆様の多大なるご尽力と、文部科学省、外務省、JICAなどの皆様からの強力なご支援のおかげで、この事業を現在に繋げていくことができました。

このたび15周年という節目を迎え、多くの方々にご出席いただいて記念シンポジウムを開催できますことを、大変嬉しく思っております。

本日は、最初に来賓の皆様からお言葉をいただき、続きまして、井上正幸様に基調講演を、そして、高橋博史様に特別講演をしていただきます。その後、現在本学で学んでいるアフガニスタン留学生による現状の報告、元留学生からのビデオメッセージがあり、最後に、私がこの15年間の教育支援活動の振り返りをさせていただきます。

ご存知のように、現在もアフガニスタンの置かれている状況は大変厳しく、女性の識字率は依然として低いままだと聞いております。本シンポジウムを通じて、アフガニスタンにおける女子教育の重要性を改めて確認するとともに、「アフガニスタンの教育の発展のために、私たちができること、なすべきことはまだまだ残されている」とのメッセージを広く社会に向けてお伝えしたいと思っております。

皆様には、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

以上、簡単ではございますが、開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶

バシール・モハバット氏（駐日アフガニスタン・イスラム共和国特命全權大使）

遠山 敦子 氏（元文部科学大臣、お茶の水女子大学名誉博士）

池原 充洋 氏（文部科学省大臣官房文部科学戦略官）

萱島 信子 氏（独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所副所長）

高橋 裕子 氏（津田塾大学 学長）

小野 祥子 氏（東京女子大学 学長）

今岡 春樹 氏（奈良女子大学 学長）

大場 昌子 氏（日本女子大学 学長代行）

バシール・モハバット氏

駐日アフガニスタン・イスラム共和国特命全權大使



H.E. Ambassador Dr. Bashir Mohabbat was born in Kabul, Afghanistan in 1956. He came to Japan for the first time in 1976 as a foreign student, and obtained his Bachelor's and Master's degrees, as well as Ph.D in International Law in Japan. Amb. Mohabbat joined into the service of his home country in 2003 as a diplomat stationed in Tokyo. He assumed his position of Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of the Islamic Republic of Afghanistan to Japan in July, 2017. Of Dr. Mohabbat's many accomplishments, most notable are the special and close relationships that he has built with prominent Japanese political, economic and cultural organizations and groups, his contributions as an instructor in the same field at a number of universities and colleges, and his service to Afghanistan and Japan through his various roles assigned in Tokyo and Kabul.

皆さん、こんにちは。

本日は、このような場でご挨拶させていただき大変光栄に思っております。

まず初めに、アフガニスタン女子教育支援15周年に際し、お茶の水女子大学コンソーシアム、文部科学省、国際協力機構（JICA）の皆様には感謝いたします。この会場にいらっしゃる皆様のご承知のとおり、私の母国、アフガニスタン・イスラム共和国においては、女子教育を前進させることが非常に重要です。

2002年に東京で「アフガニスタン復興支援国際会議（東京会合）」が開催されて以来、アフガニスタンの再建に向けた支援が計画的に進められ、日本との関係も緊密になりました。アフガニスタンが困難を乗り越えられるよう、日本は私意なく戦後復興や政府機能の再建を支援し、アフガニスタン人の親友となりました。こうした日本の支援の中には学校や教育に関するものも多く含まれていました。現在、政権をとっている国家統一政府は、教育を最重要課題の一つに掲げており、国の再建にとって女子教育がいかに重要かを認識しています。2002年に、アフガニスタンの女子教育の普及・発展に貢献することを目的として、日本の最も高名な五つの女子大学によってコンソーシアムが結成されたことを、我々は、日本政府がいかにアフガニスタンの教育支援に力を注いでいるかを示す事例として受け止めました。

この15年間、アフガニスタンは一つの目標に向かって数々の政策を実施してきました。すなわち「すべての高い志を持った女性たちが学ぶことができ、最も野心的な夢を実現できる国にする」ということです。そのために、女性に対する教育の機会の提供、女子のための教育システムの構築、学校運営の改善を主眼とした復興事業が進められました。その結果、アフガニスタンの女性たちが様々な分野において、自らの能力を向上させる機会を得たことに疑いの余地はありません。私は自信をもって、こうした諸事業がアフガニスタンの特に若い女性層に画期的な成功をもたらしたと言えます。

そのことは、小中学校に通う子ども数の増加や社会における女性の地位向上という形でも現れます。

今日では、全国に1万5千校以上の小中学校、150校以上の大学があります。2001年に90万人だった学生数は、2016年には590万人以上になりました。タリバン支配下においては、女子

には教育の機会が与えられませんでしたので、かつてアフガニスタンの学生は全て男子でしたが、現在は女子学生も増えています。2016年には、ルラ・ガニ大統領夫人によって国内初の女子大学が設立されました。

アフガニスタンへの女子教育支援事業が始まった2002年には、正規の教育を受けている子どもは少なく、学校に通っていたのは6人に1人ほどでした。その後、2017年までに学校に通う子どもの数は900万人以上も増加し、現在では、6人に5人が小中学校教育を受けています。このうち40%が女子です。

学校教育を受けた女子が劇的に増加したことは、アフガニスタンの社会、政治、経済の各方面に数々の良い影響を与えました。今年半ばまでの各職業分野における女性の割合を見ますと、公務員の20%以上、国会議員の27%が女性です。また、7万2600人以上の女性教師、3700人の女医、240人以上の女性裁判官がいます。閣僚、外交官、パイロットになった女性もいます。さらに、経済界の著名人、政界や市民社会のリーダーや、目覚ましく進展を遂げる内包的なアフガニスタンにとってのロールモデルとして活躍する女性たちが、アフガニスタン全土に登場しています。

アフガニスタンが、将来、自立した、強靱で平和な国となるためには、若者への教育が不可欠です。国家統一政府は、お茶の水女子大学を含む世界各国の政府や非政府組織と協力しつつ、アフガニスタンの若者が自らの可能性を最大限に活かせるような、健全かつ充実した教育環境の整備に力を注ぎました。ですから、近い将来、アフガニスタンの少年・少女たちは、平和な社会で、人権を尊重されながら成長し、指導者、裁判官、医者などとして活躍し、母国の豊かな文化的、社会的伝統を継承していくことになるでしょう。

我が国は、復興・再建において、国民の能力を向上させ、平和と繁栄を実現することを目指しました。個人の能力、専門的技術、学生の学術的知識を開発することが、アフガニスタンの治安改善、民主主義の発展、平和の実現に向けた努力につながっていくからです。その考えが正しいことは、特に女子教育支援の成果により証明されています。我が国のキャパシティ・ビルディングは希望に満ちています。

これまで日本の皆様が、アフガニスタン・イスラム共和国の若い女性たちの教育向上のために、無私無欲で行動し、惜しみない支援をしてくださったことを、私は光榮に思っております。我が国が様々な事業を適切かつ有効に実施し、着実な成果を上げることができたのは、日本の政府と国民、お茶の水女子大学をはじめとする五女子大学コンソーシアムの皆様の、15年間にわたる良心的なご支援とご尽力の賜物です。アフガニスタン政府と国民は、心から感謝するとともに、このような関係が今後も続いていくことを切に願っております。

本日ここにアフガニスタン大使として、アフガニスタン政府と国民を代表し、改めて皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

遠山 敦子氏

元文部科学大臣、お茶の水女子大学名誉博士



1962年東京大学法学部卒業後、文部省初の女性キャリアとして入省。高等教育局長、文化庁長官、駐トルコ共和国日本国大使、国立西洋美術館長を経て、2001年小泉内閣の文部科学大臣に就任。その後、国立劇場運営財団理事長を務めた。現在は、トヨタ財団理事長、日本いけばな芸術協会会長など。著書に『トルコ世紀のはざままで』（日本放送出版協会、2001）『こう変わる学校 こう変わる大学』（講談社、2004）『来し方の記』（かまくら春秋社、2013）ほか。

アフガニスタン女子教育支援15周年記念シンポジウムの開催に際し、都合により出席が叶いませので、まことに恐縮ではございますが、メッセージを送らせていただきます。

2002年に開始した五女子大学によるアフガニスタン女子教育支援から15年を経て、このようなシンポジウムが開催されますことに、大変感慨深い想いを持っております。アフガニスタン復興支援は、様々な意味で、わが国にとって新しいチャレンジでした。

2001年、私が文部科学大臣に就任して間もなくニューヨークで起きた9・11事件は世界を震撼させました。その後アメリカ軍によるアフガニスタン攻撃が始まり、同年12月にタリバン支配が崩壊しました。その直後の2002年1月に「アフガニスタン復興支援国際会議」が東京で開催されまし

た。その席上で、アフガニスタン暫定行政機構は、復興の鍵となる優先分野として、「行政能力の向上」や「インフラ整備」と並んで、「教育、特に女子の教育」を掲げました。アフガニスタン復興支援はその初期の段階から、教育の復興を重視するよう計画されました。

このことは、アフガニスタンの復興を考える上で、大きな意味がありました。すなわち、20年以上にわたって紛争の影響を受けてきた人々にとって、教育、特にタリバン支配下で禁止されていた女子教育の復興は、待ち望んでいた、平和に向けた目に見える一歩でした。加えて、人々、特に女性たちが読み書きの能力を身に付け、様々な情報を獲得し、また外に向けて発信することは、平和の定着に向けての重要なステップであった、ということだと考えています。

アフガニスタン女子教育支援を実現するにあたり、担当大臣として当時のお茶の水女子大学本田学長にお声がけしたところ、直ちに他の著名な女子大学と連携をとり、女子大学コンソーシアムをつくり見事に対応してくださいました。東京での「アフガニスタン復興支援国際会議」直後の2002年2月1日には、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学の五女子大学の学長のイニシアティブで「アフガニスタン女子教育のための女性教員研修プログラム策定検討委員会」が立ち上がり、アフガニスタンにおける調査を含め、女性教員のためのプログラムの検討が行われました。これは日本の女子大学にとっても大きな挑戦でした。

2002年4月には、アミン教育大臣が来日され、教育専門家の派遣、UNESCOを通じた識字教育支援等と並んで、五女子大学による女性教員研修への支援をお伝えし、アミン大臣からも大変有意義であるとの発言がありました。

また、「国費留学生アフガニスタン特別枠」として、復興を担う人材育成への支援も行われましたが、

これにより、多くのアフガニスタン女性が日本で学んでいます。

本シンポジウムでは、こうした女性教員研修、女子留学生受け入れの取り組みと成果について、様々な角度から議論されるものと思います。

アフガニスタンにおける女子教育の復興への支援は、私たちが考える以上に難しい仕事でもありました。治安が改善しない中で、学校は文字通り攻撃の対象でした。アフガニスタンにおいて、女子、女性が学び続けるということが、様々な障害とぶつかるということは想像に難くありません。そのような中にあっても、多くの学ぶ意思を持つ少女や女性たちがいることは、我々にとって驚きであるとともに、勇気を与えてくれるものでした。

アフガニスタンの現状は、皆さまご存知のように大変厳しいものがあります。特に、2014年末の駐留外国軍戦闘部隊撤収以降、治安は悪化の一途を辿っています。弱い立場にある女性と子どもがテロの被害者の多くを占めることに加えて、治安状況により未だ350万人の子どもが小学校に通えず、その内75%が女子であると報道されています。そのような厳しい状況にあるからこそ、本シンポジウムを通じて、アフガニスタンにおける女子教育の重要性について、「忘れていない」「関心を持ち続けている」というメッセージが発せられることは大変意義深いことと考えております。

また、各大学は、アフガニスタン女子教育支援を一つの契機として、留学生受け入れをはじめとした開発途上国の女子教育への支援や国際理解教育等、様々な形で国際的な課題に取り組まれていることと思います。こうした取り組みに敬意を表しますと共に、今後の発展を祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。

代読…原智佐（グローバル協力センター副センター長）

池原 充洋氏

文部科学省大臣官房文部科学戦略官



東京大学法学部卒。

1982年文部科学省入省。学際局国際企画課国際教育室長、初中局特別支援教育課長、高等局視学官兼内閣参事官、文化庁長官官房国際課長、開発局参事官、官房国際課長、埼玉大学理事兼事務局長等を経て、2017年8月より現職。

池原と申します。ユネスコ担当の文部科学戦略官をしております。川端国際統括官が、現在、タイに出張中でございますので、代わって挨拶をさせていただきます。

本日、アフガニスタン女子教育15周年記念公開シンポジウム「アフガニスタン女子教育…支援の歩みと現状」が開催されるにあたり、文部科学省を代表して心よりお祝い申し上げます。

アフガニスタンへの支援に関しては、2002年に日本政府が、米国やEU等と共に共同議長となつて、「アフガニスタン復興支援国際会議」を東京で開催し、アフガニスタンの復興に貢献し、同国の平和と安定を支える、とのメッセージを世界に発信しました。復興支援のための重要分野の一つとして、教育が掲げられ、その中でも女子教育の重要性が強調されました。

また、2000年4月に、「万人のための教育（EFA）」の達成に向けて「ダカール行動枠組み」が採択されたこともあり、文部科学省では様々な事業を通じて、EFA目標の達成やアフガニスタン

の復興支援に向けた取組を推進してまいりました。

このような潮流の中で設立されました五女子大学コンソーシアムには、長きにわたって紛争下にあったアフガニスタンの女子教育の復興に向けて、多大なる御尽力をいただきました。留学生の受け入れや研修プログラムの実施をはじめ、今日に至るまで様々な取組が展開されています。多岐にわたる人材を育成してきた実績を持つ日本の女子大学による支援の意義は非常に大きく、現在では、就学率や識字率について向上が見られる、との報告が現地から寄せられるようになっております。

一方では、アフガニスタンに限らず、世界の様々な国において、その地域が抱える状況などに起因する深刻な課題が発生しています。2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」には、すべての子どもが男女の区別なく質の高い教育を受けることや、教育のジェンダー格差解消などが明記されています。また、日本においても「すべての女性が輝く社会」の実現を目指して、今月初旬に「国際女性会議WAW!」を開催するなど、政府を挙げて国際社会と共に様々な取組を展開しています。

本日のシンポジウムでは、これまでのアフガニスタン女子教育支援の振り返りや現状と課題の共有が図られるとお聞きしております。今後の国際協力のあり方に関して学び合う、有意義な機会となります。まずことを期待しております。

最後になりましたが、本シンポジウムの開催にご尽力されました、お茶の水女子大学の室伏学長、関係者の皆様に敬意を表し、私の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

萱島 信子氏

独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所副所長



京都大学文学部卒

UNESCO 国際教育計画研究所教育計画行政研修コース修了

パリ第5（ルネ・デカルト）大学教育学部 3ème cycle DEA 課程修了

名古屋大学国際開発研究科 博士（国際開発学）

国際協力事業団入団後、国際協力機構人間開発部基礎教育グループ長、同人間開発部長、同バン格拉デシュ事務所長等を経て、現職。

皆様こんにちは。

2002年の五女子大学コンソーシアムによるアフガニスタン女子教育支援開始から15年目の節目の年にあたり、このようなシンポジウムが開催されますこと、また、アフガニスタンをはじめとする厳しい状況のもとにある国々の女子教育のために、各大学が様々な取り組みを続けておられることに、まず、敬意を表したいと思います。

国際協力機構（JICA）は、開発途上国への復興支援や開発援助を行う機関でございます。アフガニスタンの教育復興支援を行うにあたり、私自身は、2004年から2010年にかけて、教育協力の調査のため、たびたび現地を訪れ、教育をめぐる厳しい状況を垣間見る機会をいただきました。アフガニスタンでは、長年にわたる戦乱を経て、2002年3月には、学校が再開しましたが、教育行政が整備されていない中で急激に学校が拡大したため、児童・生徒の数はもちろん、学校の数、教

員の数も把握できていない状況が続いていました。また、特に地方では、学校が再開してもタリバンによって攻撃され、子どもや教師が亡くなるというような痛ましい事件も発生しておりました。それでも、学校は子どもたちで溢れていました。戦場で半分壊れた校舎をビニールシートで区切った教室や、校舎がない場合には青空教室で、授業が行われていました。学校の視察に向かう道すがら、カバン代わりの色とりどりのプラスチックバケツの中に、ノートや鉛筆を入れた子どもたちが、嬉しそうに学校に向かって歩いていく姿をよく目にいたしました。そうした小さな女の子たちの笑顔を、私は今も忘れることができません。小学校、中学校、教員養成校、大学、あるいは大人のための識字教室、どこに行っても、児童・生徒・学生が、「学校に行きたい」「勉強したい」という気持ちを持っていたことが、強く印象に残っています。アフガニスタンにおける女子教育については、皆様ご存知のように、1996年から2001年のタリバン支配下では禁止されていました。しかし、女子の教育に対するニーズや期待がなくなった訳ではありませんでした。タリバンの支配が及ばない地域では *community-based school*、都市部では *home school* という形で、細々とはありますが、女子教育の重要性を認識した教員や親によって授業が行われていたそうです。危険を冒してでも学びたい、学ばせてやりたい、という女の子やその親の気持ちを思うと、胸が痛みます。

女子教育の重要性については、私から申し上げるまでもありませんが、アフガニスタンのような国においてこそ、女子、女性が人生を切り拓いていく上で、教育の意義は高いと言えるでしょう。その一方で、アフガニスタンの教育は、今もまだ多くの課題を抱えています。特に、女子の教育環境に関しては、女性教員の養成や配置、女子の可能性を伸ばすような教科書の整備、地域や親の女子教育に対する理解といったことが解決されなければなりません。五女子大学による女性教員研修においては、

こうした課題に対応し、招聘された女性教員が理解を深められるよう、工夫を凝らしたプログラムが実施されていました。特別支援学校や遠隔地の学校を含む様々な日本の教育機関を訪問し、実際の授業を視察したことは、女性教員たちにとって、大きな刺激になったことと思います。

JICAは女子教育の他にも教員の指導力の向上、識字教育、障害を持った子どもたちに対する教育等、教育分野の様々なプロジェクトを実施してきました。この点については、特に2010年以降、現地の治安が非常に悪化しており、JICAの職員や様々な分野の専門家を現地に派遣することが非常に難しくなっています。アフガニスタンの教育、女子教育を取り巻く状況は、依然として厳しいと言わざるをえません。国際協力の関係者が現地に赴くことが難しい状況は大変残念であり、何とかこれまでの協力を繋げて、現地の教育に力を貸せないものかと思っています。しかし、教育は長期的な取り組みでもあります。JICAは、「未来への架け橋・中核人育成プロジェクト (Peace Project)」を立ち上げ、アフガニスタンから留学生を招聘して日本の大学に受け入れていただき、将来に向けて人材を育成する試みも行っております。

多くの日本の大学、特に女子教育に携わる五つの女子大学が、アフガニスタンの教育に今も関心を寄せ続け、様々な形で教育協力の取り組みを継続していること、また、本日このようなシンポジウムが開催されたことに、JICAを代表して、敬意と感謝の気持ちを表し、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

高橋 裕子氏

津田塾大学 学長



津田塾大学英文学科卒業。筑波大学大学院（国際学修士）、米・カンザス大学大学院（M.A., Ph.D.）などを経て、1997年から同大学専任教員、2016年4月より現職。

専門は、アメリカ社会史（家族・女性・教育）、ジェンダー論。

著書に、『教育とLGBTIをつなぐ』（青弓社、2017）（分担執筆）、『家族と教育』（明石書店、2011）（共編著）、『女性と高等教育―機会拡張と社会的相克』（昭和堂、2008）（分担執筆）、『津田梅子の社会史』（玉川大学出版部、2002）（単著）（アメリカ学会清水博賞）等。

アメリカ学会副会長、日本学術会議連携会員。

皆様こんにちは。

私のご挨拶は、お手元の資料の9ページから10ページに書いてありますので、詳しくはそちらをご覧くださいと思います。

私自身は、2002年8月24日から9月2日まで、アフガニスタン女子教育支援のための事前調査団の一員としてカブールに派遣されました。五女子大学の教職員を含む8名の調査団で、このメンバーとは今でも目に見えない絆で強く結びついているように感じています。今日この会場に、団長を務められた藤枝修子先生を含め、中道貞子先生、田中若代先生がいらしていることを確認いたしました。もしかしたら、他の方もいらっしゃるかもしれませんが。

文部科学省や外務省の方々のご支援をいただきながら、カブール大学や、いくつもの女子校を訪問し、多くのアフガニスタンの女性たちと出会うことができました。その時の一つひとつの経験は、私

の記憶に深く刻まれています。女性省を訪問した際、飢えや貧困の中、世界への憎悪と共に育つ孤児や寡婦への対策が打ち出されなければ、国際社会の安定はもちろん、女性の地位や教育の向上も実現できないと、副大臣が自らの経験を含めて熱く語ってくれました。通訳者の男性が涙で声を出せなくなってしまったことを鮮烈に覚えています。

2002年度の後半には、アフガニスタン関連の講演会や研修を五女子大学で連携して頻繁に開催いたしました。私自身も事前調査の報告として9月25日に「カブールのいまー教育にかける女性たちの夢」と題して、写真や映像を用いて講演会に登壇いたしました。当時、カブールの状況についてはメディアの関心も高く、新聞記者のインタビューも受けました。

このような形でアフガニスタンへの教育支援を開始し、津田塾大学は、2015年に国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所と「難民高等教育事業に関する協定」を締結いたしました。協定締結後、初めて受け入れた学生はイスラム圏からの女子学生でした。現在、本学では、2名の留学生を受け入れ、奨学金を出しております。

2002年に始めた女子教育のためのプロジェクトが、こういった形で結実していることを、大変嬉しく、また、誇りにも思っております。多くの方々そして諸機関からの温かいご支援に深く感謝申し上げます。

小野 祥子氏

東京女子大学学長



東京女子大学学長の小野でございます。

本日は、五女子大学コンソーシアム結成から15年の節目を迎え、アフガニスタン女子教育支援15周年記念公開シンポジウムをお茶の水女子大学で開催していただき、また、この貴重な機会にお招きいただき、心から感謝しております。

2002年5月、アフガニスタン女子教育支援事業推進のために、五女子大学コンソーシアムが立ち上げられました。当時の、お茶の水女子大学本田和子学長から、東京女子大学の湊晶子学長に参加の呼びかけをいただき、本学も参加させていただくことになりました。湊学長は、このようなチャンスを与えられたことを大変に喜びました。彼女自身が、第二次世界大戦を経験していたこともあり、その戦禍から復興した日本が、同じように戦禍に苦しむアフガニスタンの女性に支援の手を差し伸べることにについて、大いなる使命感と情熱をもって取り組みました。

1970年東京女子大学文学部英米文学科卒業。1973年東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了（文学修士）。
1982年東京女子大学文学部専任講師、1988年同助教授、1995年同教授。専門分野は英語史。1993年および2008年にロンドン大学にて visiting scholar。東京女子大学大学院合同研究科会議議長、現代教養学部全学共通教育部長などを歴任。

現在、（公財）大学基準協会大学評価委員会委員、（一社）日本私立大学連盟常務理事、内閣府男女共同参画推進連携会議議員、日本私立学校振興・共済事業団非常勤理事。

アフガニスタン女子教育支援学内運営委員会が組織され、私もメンバーとなりました。そして東京女子大学が主催して様々なプログラムを実施しました。特に本学では「ダリー語講座」を開催し、学生のみならず教職員も参加して、研修生の来校に備えたことを覚えております。

女子教育の重要な使命の一つは、やはり「平和」の実現であると思います。私たちは、アフガニスタンの女子教育支援を通して、両国民の間にしっかりと絆が結ばれることを願ってまいりました。今後とも国民同士の心をつなぐ取り組みを続け、少しでも平和な世界の実現に貢献していくことができればと期待しております。

東京女子大学の初代学長新渡戸稲造は「われ太平洋の橋とならん」の名言によって知られる、日本の国際人のパイオニアです。彼は言葉のみでなく、実際にこの理念通りに、国と国の間の理解を深め、争いを鎮めるために尽力いたしました。五女子大学コンソーシアムの活動を通して、アフガニスタンの女性と日本の女性の間に、「橋」が架かったと言えるのではないのでしょうか。今後この橋を様々なレベルで発展させ、さらに強いものにしていくことができればと願っております。

本日はありがとうございます。

今岡 春樹氏 奈良女子大学長



1981年 東京工業大学 大学院総合理工学研究科修士課程修了
1989年 同大学 工学博士
1988年 工業技術院繊維高分子材料研究所応用技術部材料設計研究室主任研究官
1990年 奈良女子大学家政部助教授、1993年 同 生活環境学部助教授
2001年 同 教授、2011年 同 生活環境学部長
2013年 同学長（現在に至る）

皆さん、こんにちは。奈良女子大学の今岡です。

私が寄稿した文章は、お手元の資料の13ページから14ページにございます。その中のポイントだけ申し上げます。

まず、五女子大学コンソーシアムが結成された2002年前後は、いわゆる国立大学の法人化が始まる、まさにその時期でした。その大変ななかに、よくこういうことをされたなというのが実感です。それからもう一つびっくりしたのが、資料に掲載されている、当時の五女子大学の学長が一堂に会した写真です。すべて女性であった。こんなファントスティックなことはありません。今は、私だけが男性ですが、本当は全員女性でなければいけない。しかも、五女子大学の名称はあいいうえお順に表記されるのですが、この写真の学長の並び方は、背の順ではないでしょうか。たぶん皆さん方の間で、「どう並ぶの?」というやりとりがあり、「じゃあ背の順にしましょう」というところに落ち着いたの

ではと想像されます。学長というポジションにある女性たちがこういうことをしながら、この時期に、いち早くアフガニスタンに対して協力を申し出たことは、同じ日本人として、素晴らしいと思います。女子教育というのはとても大変です。実は、私は男性ながら被服を担当しております。裁縫の先生です。そもそも女子大学というところは裁縫を教えるところなのですけれども、私が奈良女子大学に赴任した当初、学生が「『大学にまで行つて裁縫を勉強しているの?』とよく馬鹿にされる」とこぼしました。そこで「よし、私が世界一の裁縫を教えてあげよう」ということで今日までやってきました。では、どうして日本の学校教育において裁縫がそこまで重視されたかと言いますと、実は日本でも、明治時代には、女子を小学校に入学させるのがとても大変でした。その年齢になれば、子どもはもう働くことができるので、親が入れたがらなかったのです。そこで、とても大切な家事の一つであった裁縫を利用しました。小学校に行けばタダで裁縫を教えてもらえる。だから女子を小学校に入れよと呼びかけたのです。アフガニスタンだけでなく日本でも、こういう工夫をして識字率を上げようとした時代があったのです。明治時代ですからそんなに昔ではありません。

さらに遡りますと、1200年ぐらい前の奈良において、聖武天皇は東大寺を総国分寺として、光明皇后は法華寺を総国分尼寺として建立しました。これらは今の大学にあたるものですが、国分尼寺という女性のための大学も作っています。このように、日本には、女性と男性が良いパートナーとして学ぶという伝統があるのです。

ですから、私たちとアフガニスタンの人たちが、シェイクハンドしながら未来に向かっていけば、きっと未来は素晴らしくなると考えています。

大場 昌子氏

日本女子大学学長代行



日本女子大学文学部英文学科卒、同大学院文学研究科英文文学専攻修了。
桜美林大学文学部専任講師、同助教を経て、日本女子大学文学部英文学科准教授、
同教授。

この間イリノイ大学客員研究員（2002年）。

2013年4月～2017年3月 副学長。

2017年4月より学長代行。

皆様こんにちは。日本女子大学の大場でございます。

まず、アフガニスタン女子教育支援15周年記念公開シンポジウムをこのように盛大に開催してくださいました、室伏きみ子学長をはじめお茶の水女子大学の皆様に、また、お忙しい中ご列席いただきました御来賓の皆様に、心より御礼申し上げます。

さて、アフガニスタン女子教育支援がスタートより15年を数えましたこと、そして、これまで本当に多くの高い志をもった方々がご協力くださったことに対して、私個人としても、大学としても、深い感謝を覚える次第でございます。

これまでに、日本女子大学は理学部の博士課程に留学生を一人お迎えし、その方への支援を通じてアフガニスタンとの交流を深めてまいりました。その方は博士の学位を取得されて、現在はカブール大学で活躍していらっしやるとお聞きしています。

さらに本学は、ダリ語に翻訳された家庭科教育のテキストを使うなど、実践的な女性教員の研修も行い、附属校園を持つ総合大学としての強みと弾力性を發揮して、日本女子大学独自の取り組みを行ってまいりました。

また、本学の附属高等学校には、1年おきに、アフガニスタンの高校生2名と先生1名が2週間ほど滞在して、勉学はもちろんのこと、クラブ活動、地域活動などを共にします。附属高校の生徒たちは事前に、どのようにすれば双方向に学ぶことができるのかということを真剣に考えて、いろいろなイベントを企画します。そうした交流を通して、生徒たちは徐々に文化の違いを超えて、同じ女子高生として共通する点を認識するようになっていきます。私は、最後のお別れ会に参加させていただいたことがあります。ティーンエイジ同士が心を開いて交流し、お互いの将来を称え合っている光景を目の当たりにして感激いたしました。

こうしている間にも、世界の情勢は急速に変わっています。今もとても重要なことは、この教育支援を今後も変わらずに継続していく強い意志を持つことだと考えます。それには日本の五女子大学が連携することが不可欠です。アフガニスタン女子教育支援を通じて、五女子大学が協力関係を一層強固なものとし、社会に発信し、貢献していけるよう願ってやみません。

本日は誠にありがとうございました。

基調講演

「山と山は歩み寄らないが、人と人は歩み寄れる

「アフガニスタン女子教育支援と平和達成への尽力」

井上正幸氏 元文部科学省国際統括官、(公財)日本国際教育支援協会理事長



1948年 東京で出生

1959年～62年 イラン国テヘラン市の現地小学校卒

1968年～76年 東京外国語大学インド・パキスタン語学科卒、中央大学法

学部卒、英国リバプール大学行政学修士取得

1974年 文部省入省 国際学術課長、国際企画課長、学術国際局担当大臣官

房審議官を歴任

2001年 省庁再編後、文部科学省科学技術・学術政策局次長

2004年 国際統括官(日本ユネスコ国内委員会事務総長)を経て退官

2006年 在バンングラデシュ日本国特命全權大使

2009年～(公財)日本国際教育支援協会理事長 現在に至る

2012年～17年 OECD教育研究イノベーションセンター運営理事会 理

事・議長、教育政策委員会副議長 現在に至る

2016年～ 独立行政法人日本学術振興会特別参与(国際担当) 現在に至る

2002年 仏政府より教育学術功労勲章(オフィッシェ)受章



ご紹介にあずかりました井上でございます。今日は、「アフガニスタン女子教育支援15周年」の大変おめでたいシンポジウムにお招きをいただき、お話しする機会をいただきました、ありがとうございます。また、アフガニスタン女子教育支援という大変難しい仕事にこの15年間取り組んでこられた、室伏学長はじめ五女子大学の関係者の方々に、心より感謝と敬意をお伝えしたいと思います。

活動の経緯については、先ほどの遠山元文部科学大臣のメッセージ等にもございまして、私の方からは、プロジェクトの発端、立ち上げ時の思い、現状、未来への希望、あるいは大学への期待について、お話をしたいと思います。

1. 「民族・宗派を超えて一つに」の願い

アフガニスタンは、ヒマラヤに続くヒンドークシュの大山脈が連なるところにあります。有力な国々に囲まれており、パキスタン、イラン、あるいは旧ソ連、中国とも国境を接しています（図1）。

この写真は2002年、アフガニスタンに行く道中に撮影したものです（図2）。その時はパキスタンの核実験の影響で、インド経由でアフガニスタンに入れず、ヒマラヤの上空を通過してパキスタンのイスラマバードを経由し、そこから国連機に乗り換えてカブールを訪れるという行程でした。

ヒマラヤの山々



最初に述べましたように、ヒンドウークシユはヒマラヤから連なり、さらにはエルブールズ山脈やコーカサス山脈、アルプスへと続く、ユーラシア大陸の造山活動の一端にある大山脈です。会場にモハバット大使がいらっしゃいますから、後ほどダリー語のご確認をいただけるとありがたいのですが、そもそも「ヒンドウークシユ」とは、インド人を殺す^①という意味だそうです。インド側からは、越えるに越えられないヒンドウークシユ。それだけ険しい山が連なっている地域だというふうに私は理解しておりますが、正しいでしょうか。

図
3

アフガニスタンの概要ですが、日本の1.7倍にあたる国土を有し、人口は2916万人。正式な国名が「アフガニスタン・イスラム共和国」であることからお分かりいただけるように、主な宗教はイスラム教です（スンニ派が82%、シーア派が17%）（図3）。公用語もパシュトゥー語とダリー語の二つの言語があります（図4）。

実は1カ月くらい前に、モハバット大使の公邸にお招きいただき、アフガニスタンの国歌を初めて聴きました。その歌詞には、アフガニスタンの民族はパシュトゥーン、タジ

アフガニスタン概要



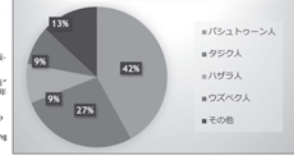
- ▶ 正式国名：
アフガニスタン・イスラム共和国
- ▶ 首都：カブール
面積：日本の1.7倍 人口：2,916万人
- ▶ 宗教：
イスラム教 99% その他宗教 1%
(スンニ派 82%、シーア派 17%)

出典：外務省 国別基礎データ 概要版 <http://www.mofa.go.jp/renaj/area/afghanistan/data.html> 2017年10月現在
『データブック オフ・ザ・ワールド 2017年版』世界地図編集と解説部1-1 二葉書版、2017年

アフガニスタン概要

▶民族（多民族）・言語（多言語）

- ・バシュトゥーン人 42 %（バシュトゥー語）
- ・タジク人 27 %（ダリー語、タジク語）
- ・ハザラ人 9 %（ハザラギ語）
- ・ウズベク人 9 %（ウズベク語）
- ・その他 13 %（トルクメン語他）



参考文献：『アフガニスタン・オプ・ザ・ワールド 2017年版』世界各国事情と最新統計② 二宮書店、2017年
 “Wikipedia: アフガニスタン” 8 民族、9-1 民族、9-2 言語
<https://ja.wikipedia.org/wiki/アフガニスタン> 2017年10月閲覧
 “独立行政法人国際協力機構（JICA）各国における取組の紹介 アフガニスタン/民族・言語”
<https://www.jica.go.jp/afghanistan/office/others/ethnicity/ethnicity.html> 2017年10月閲覧

ク、ハザラ、ウズベクと多岐にわたっているけれども、皆アフガン人であり、共に頑張ろう、という意味の詞が入っていました。多民族かつ多言語であるため、国を統率することは非常に難しい。地形も山また山ということもあり、地の利を得ての治世は難しい国、それがアフガニスタンです。

ここで本日の講演を「山と山は歩み寄らないが、人と人は歩み寄れる」と題した理由を申しますと、ダリー語に「クー・ベ・クー・ナミレサッド、アーダム・ベ・アーダム・ミレサッド」（山と山は歩み寄ることができないけれども、人と人は歩み寄れる）という慣用語があるのです。宗教的な慣習の違いや思想の対立、民族間の抗争など難しい国情がある中でも、アフガニスタンの人々には国を一つにまとめていこうとする思いがあります。

また、とりわけ9・11の後、アフガニスタンの女子教育は困難な状況にありますが、この難しい課題を真摯に受け止め、勇敢にも支援・協力しようご決断をされた五女子大学の方々の志も、この言葉に通じるものがあると思います。実際、これまでの活動は、ボランティア精神と勇氣に溢れたものでした。

2. 女子教育支援プロジェクトチームが結成されるまで

そもそも復興支援活動の起こりは、9・11後の対テロ戦争の後、日本の内閣でも、アフガニスタンをテロの温床にしてはならないとして、国家の再建を支

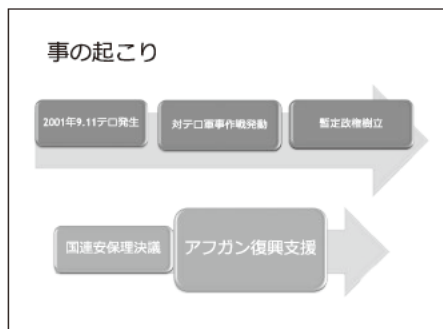


図5

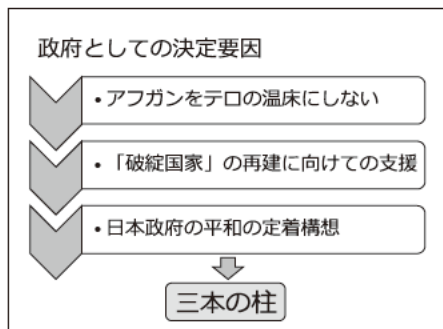


図6

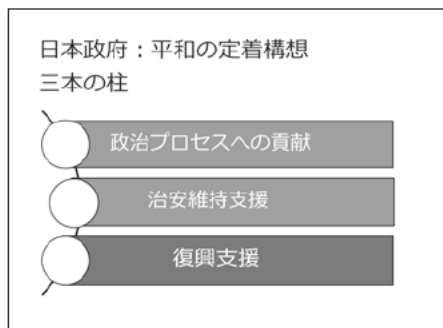


図7

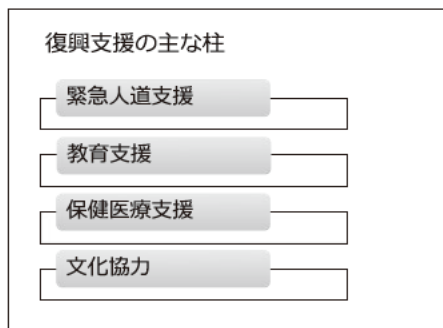
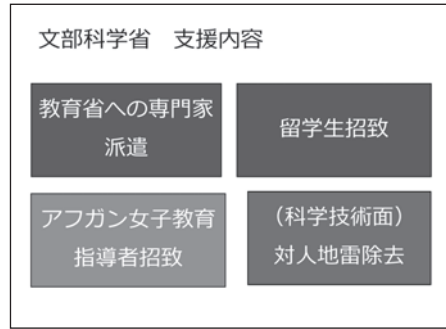


図8

援する動きが起こったことです（図5、6）。支援にはいろいろなアプローチがありますが、最も急を要するものは、国のガバナンスを確立するための政治プロセスへの貢献や治安維持活動への支援です。加えて、復興支援も欠かせません（図7）。復興支援は、緊急人道支援を筆頭として、教育支援、保健医療支援、文化協力が主な柱となるでしょう（図8）。文部科学省は遠山大臣（当時）により教育支援のための専門家の派遣、アフガニスタンからの留学生の招致、女子教育指導者の招致を開始しました。同時期に省庁再編により文部省と科学省が統合された背景もあり、科学分野での支援も行うべきとの声上がり、対人



地雷除去支援も実施しました。この仕事も大変難しい仕事でしたが、官民協働で取り組みました（図9）。

この時、文部科学省にアフガニスタン支援プロジェクトチームが結成されました。省庁再編後、私は科学技術学術政策局の次長を務めており、アフガニスタンとは特に関係のない仕事をしていました。ところが、北陸に出張していた時、大臣室から、遠山大臣が会議を行うのですのですぐに戻って来てほしい、との連絡を受けたのです。ちょうど旬の越前ガニを食べたかったのですが、悠長なことを言っている場合ではありません。至急帰って出た会議で、遠山大臣より「井上さん、貴方はアフガニスタン周辺に知見を有していると伺っています。当局では今、支援協力チームを結成したところで、貴方にチームの一員として加わってほしいと考えています」との要請をいただきました。

3. 私とアフガニスタンとの関わり

実は私は、アフガニスタンに深い縁があり、亡くなった父母が昭和14年から20年までアフガニスタンに滞在していたのです。第二次世界大戦中、中立国であったのが、アジアではアフガニスタンとタイ（最後は連合軍側）でした。しかし、日本の戦況が非常に悪化した昭和19年、国外退去を迫られ、母は子ども二人を連れて日本に帰らなくなりました。この時はまだソ連が対

日参戦をしていませんでしたが、強盗などに遭う心配がありましたので、モハメド・ザヒル・シャー（在位1933～1973年）という王様のはからいで、アフガニスタンの国境を越えるまで、一個小隊を護衛に付けていただきました。国境を越えれば、シベリア鉄道の支線に乗り、タシケントから日本へ帰れます。日本の敗色が濃厚な時期に、苦しい状況を慮って警備をつけてくださったご恩に報いたいとの思いが、私にはありました。

また、私はアフガニスタンの隣国イランに滞在してダリー語を勉強していた時期もあります。大学3、4年生の時でしたか、まだ平和だったアフガニスタンに旅行をして、今は破壊されてしまったバミヤンの遺跡を見に行ったこともありました。アフガニスタンは仏教伝来の地であり、日本人にとっても歴史的に親しみの湧くエリアでした。ですから、文化的見地から私も私はアフガニスタンが復興してほしいと考えていたのです。

そのような折に、遠山大臣から絶好のタイミングでお声掛けいただき、アフガニスタンのために何をすべきかを皆様と共に一生懸命、立案してきた次第です。

今でも記憶に残っているのは、プロジェクトチーム立ち上げからしばらくたった12月頃、アフガニスタンからいらったNGOの方とお話した時のことです。その方は、「アフガニスタンは天然資源が何もない国です。だか

カブール空港 破損機体の残骸も見える

図
10



らこの何十年間、国際的に関心を持たれませんでした。しかし、テロリストの巣窟になったがゆえに注目されるようになりました。私たちは世の中から、世界から見捨てられていないという感覚、ヒューマン・ボンデージ（人間同士の絆）を感じられるものを欲しています。私たちはあなた方に、ただ単に協力を仰ぎに來ただけではなく、人間の絆を確認しに來ました。それが確認できて大変うれしい」とおっしゃいました。その言葉は私たちの胸を打ちました。

その後も様々な検討を重ね、支援活動の大綱が決まりました。外務省からは、教育を活動計画の最初に置いたことについて、教育は平和が達成されてからでなければ実現しないものではないのか、との指摘を受けました。それに対し、五女子大学の先生方は、「教育こそ平和の礎である。特にアフガニスタンには女子教育が大事であると考え、すでに支援に取り組んでいる」と答えられました。その返答に、外務省の中近東局の方々は、幾分驚かれていたものです。

4. 破壊の中でも求められていた「学び」

数カ月後の2002年5月、現地調査のため、実際にアフガニスタンに行くことになりました。

国連機を利用してカブールに飛びました。この写真は、その時撮影したカブール空港です（図10）。まだ戦闘の跡が目立ち、飛行機の残骸がそのまま放置さ

日本の国旗と共に進む視察（大使車で）



図
13

背景に山々、「乾いた大地」を進む



図
11

視察 奥に破壊された博物館が見える



図
14

民宿のような
宿にて



図
12

れていました。この一帯は対人地雷が埋められており、これが除去されないと民間機は入れないとのことでした。すでに国連が南アフリカ航空をチャーターしてこの現場を訪れているということでしたから、その際に使用された区域（滑走路両側）の対人地雷は概ね除去されていたのだと思います。当時の文部科学副大臣であった岸田文雄氏（前外務大臣）をヘッドに、私がサブを務め、大学の先生方をはじめとした調査団で現地を訪問しました。内海成治先生が、すでに先遣隊として現地入りしておられました。

アフガニスタンは、背景に山々を望む乾いた大地です（図11）。宿も日本のようなホテルはなく、民間の家を借りた民宿のような宿でした（図12）。我々は、日の丸を掲げた大使車両に乗り、街中を視察していきました（図13）。

この写真（図14）の左奥に見えるのが、破壊されたカブール博物館です。カブール博物館の特に仏教遺跡に関する展示物などは大変素晴らしいものでしたが、全部破壊されてしまいました。ただし、建物は破壊されてしまいました。地下に当時の仏跡などが保存されています。タリバンなど過激派組織に知られずに破壊を免れた展示品は今、博物館

図15

各地で破壊された建物を見て回る



図16

×印のある建物



図17

破壊されたカブール大学



図18

破壊の傍らで見つける美しさ
「回教モスク」が見える

に飾られているのではないかと思います。ここの館長さんの奥様は日本人でした。

街のいたるところに破壊された建物がそのままになっていました(図15)。その壁に、白く×マークや髑髏マークが描かれているところがあります(図16)。いずれも対人地雷が埋められているところを示しています。地雷を除去した場所では青空教室が開かれていることもありました。

中東でも有数の名門大学カブール大学も戦場となり、全て破壊されてしまいました(図17)。そういう状況の中でもイスラム教のモスクが残っていたのが印象的でした(図18)。

その後、様々な教育の現場を視察しました。女子初等教育学校、女子中等教育学校・男子初等教育学校など数々の校舎を訪れました(図19～図23)。

視察中にお話したカルザイ議長からは、引き続き教育支援をよろしく願います、との要請をいただきました。

モハバット大使のお話によると、15年たった現在では学校の整備も進み、教育環境も遥かに改善されてきているようです、大変嬉しく思っています。

男子初等教育学校
文字を習う子ども達



図
21

女子初等教育学校

教育が生み出す笑顔



図
19

男子初等教育学校

肩・ひじ・ひざも並べて



図
22

女子初等教育学校：話に関き入る少女達

図
20



岸田元文部科学副大臣
と一緒に見て回る

ダリー語を交えて

子ども達の真剣な
まなざしに包まれ
ながら・・・



図
23

少女からもらった野の花と共に



図
24

「少女からもらった野の花と共に」というタイトルの写真（図24）を見てください。これは私たちが学校を訪問した際に、一人の少女が「私たちはあなたがた客人に何もおもてなしできませんが、せめてお花を差し上げたいと思います」と言って、野の花を摘んで花束にして渡してくれたのです。私は、その花束を手思わず涙しました。あの大変な時期を過ごしてきたにもかかわらず、訪れる人をもてなしたいという気持ちを忘れない子ども達に心を打たれたからです。ダリー語に「メヘマーンナワズイー」

シャー・ナーメ（王書）全5巻の1巻



図26

女子中等教育学校
バレーボールをする女子高校生



図25

という言葉があります。「客人をもてなす心」という意味です。アフガニスタン人のこの信条は、子ども達に受け継がれているのでした。

女子中等教育学校では、女子高校生がバレーボールに興じていました(図25)。こういう情景は、平和の象徴と言えるでしょう。ああ、本当に良いことだなあと思って、この写真を撮りました。

教育のレベルは、教室を視察すると、大体どの程度かがわかります。視察中に目を通した中高生の数学の教科書はレベルの高いものでした。同行していただいていた東京農工大学工学部の先生も感心しておられたほどで、我々も将来の協力に向けて、かなり勇気づけられました。

5. 「知」を女性の力にするために、私たちができること

12世紀に編纂された『シャー・ナーメ（王書）』（全5巻）という詩集があります(図26)。これは、アフガニスタンの前身であるガズニー朝の王様に、フェルドゥスイーという詩人が贈呈した詩集です。真相は定かではありませんが、この詩一行に対して金貨一枚を報酬としたため、数多の詩が書き上げられ、5冊分にも及んでしまったという言い伝えがあります。この中に紹介したい一節があります。



彼らは今どうしているのだろうか？

知のあるものは、力あるものである。老いたる心は、学びによって蘇る。
(タワーナー・ブワドゥ・ハール・ケ・ダーナー・ブワドゥ、ゼダーネシュ・
デレ・ピール・ボルナー・ブワドゥ)

現代の日本の生涯学習におけるテーマのように聞こえるかもしれませんが、アフガニスタンではすでに12世紀の詩集にこういうことが書かれています。アフガニスタンは本来、それほど教育熱心な国なのです。今、教育の機会や環境を奪われている事態は、即ち国民の権利が奪われていることを意味するのではないのでしょうか。

五女子大学が、アフガニスタンの女子教育復興支援にどの分野で協力しているのかという点については、本日の配布資料に数々の事例が出ております。大学の学科レベルでの協力に加えて、深い心の傷を負った人に対する臨床心理、女子保健教育などにも目配りが必要であるという内容に、立派な試みだと感銘を受けております。

アフガニスタンでの視察を終えた後、その足でパキスタンのイスラマバードにある青少年男子のための難民キャンプを訪問しました(図27)。アフガニスタンから逃れた若者達が、狭いところに閉じ込められるように暮らしていました。中学から高校にかけての年頃でしょうか。彼らの眼は、ガラガラしていま

「教育」は国の未来を創るもの



女子初等教育学校：学ぶことにひたむきな少女達

最後になりますが、国を越えた支援活動を行うには、ファンディング（資金調達）が簡単ではありません。本日はJICAの萱島様もいらっしゃいますが、資金調達だけでなく、人材も必要です。国を越えた医療支援活動には、「国境なき医師団」という組織がありますが、是非とも同じように、「国境なき女子教育指導者支援団」のような教育支援団体が結成され、アフガニスタンのみならずいろいろな国において女子教育の指導者養成を普及させていってほしいと思っております。この場にお越しいただいた皆様にも、ご協力をいただけると大変ありがたい存じます。

雑駁な話でしたが、ご清聴ありがとうございました。

特別講演

「男女七才にして席を同じゅうせず

ゝアフガン社会における女子教育の現状と提言ゝ」

高橋博史氏 外務省参与・大使、前駐アフガニスタン・イスラム共和国特命全権大使



カブール大学、ロンドン大学留学を経て、1989年、上智大学大学院外国語研究科卒。1990年、外務省入省。国際連合アフガニスタン特別ミッション首席政治顧問、在アメリカ合衆国日本国大使館一等書記官、在ウズベキスタン日本国大使館一等書記官兼タジキスタン日本国大使館、国際情報統括官付国際情報官（第二国際情報官室担当）等を歴任し、2012年アフガニスタン・イスラム共和国特命全権大使。2016年11月より現職。

男女7才にして席を同じゅうせず：女子教育の現状と提言

1. アフガン社会の現状

- (1) 超保守的社会
- (2) 国外追放された独立の英雄
- (3) 1978年のクーデター
- (4) 3Z=ザン、ザル、ザミーン（女性・金・土地）
- (5) 女子教育と社会変革
- (6) 2002年以降のアフガニスタン
- (7) アメリカン大学襲撃事件

2. 提言

- (1) 真の変革をもたらすには
- (2) 和魂洋才
- (3) 女子大学創設

1. アフガン社会の現状

皆さんこんにちは。ご紹介にあずかりました高橋です。まずこの場をお借りして、お集まりの大学関係者の皆様に、これまでのアフガニスタンにおける女子教育のご支援に、心から感謝申し上げます。

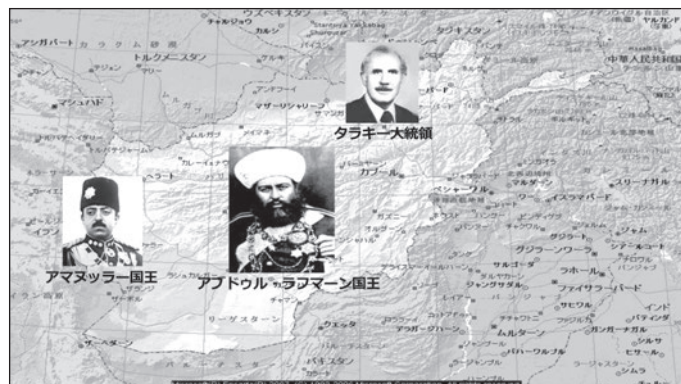
私が離任する際に、ガニー大統領から「日本の教育支援に心から感謝している」と御礼をいただきましたことも併せてお伝えしたいと思います。

それでは本題に入りたいと思います。

(1) 超保守的社会

アフガニスタンの社会は、伝統的で古い慣習が残る、超保守的な社会です。この地に住む多くの人々は、自分たちの考えを頑固に守り、変化を受け入れることに大きな抵抗を抱きます。超保守的な地域として有名なのが、タリバーンが発生した、アフガン南部にある故地カンダハールです。

ちなみにアフガニスタンには、イスラームの二大宗派、シーア派とスンニ派があります。ある時、タリバーンの幹部と話をした折、相手が「シーア派は仏教と同じだ」と言ったことに驚きました。「いや、シーア派はイスラームの一派ですよ」と何度言っても、彼は「いや、シーア派は異教徒であり、仏教と同



じだ。多神教で、偶像崇拜者でもある」と続け、断固として聞き入れません。私はその時、彼らの思想は頑迷固陋であるとともに、パシウトゥーン民族の伝統的な掟であるパシウトゥーンワリーとイスラームの戒律がミックスし、混然としているように感じました。

アフガニスタンは、拳を握って親指を突き出した形に似ています。この国土は、アフガニスタンの中興の祖であるアブドゥル・ラフマーン国王が、19世紀に大英帝国とロシア帝国からの侵略をはねのけて、現在の形を守りとった領土です。侵略を受ける以前は、より大きな領土を有していました。

この国王は、内政においては残虐非道で大変有名で、独裁者、圧制者とも言われました。図の中央にいる人物です。彼の治世では国王に異議を唱える人は、超保守主義者であろうが、近代的な思想を抱く人であろうが、国外追放、投獄、処刑といった厳罰に処せられました。

このアブドゥル・ラフマーン国王は頑なに近代化を否定し、英露の侵略を恐れてほぼ鎖国に近い政策を維持しました。しかし、彼は死にあたって「アフガニスタンの民は頑迷固陋で、裏切りは日常茶飯事、人を信じることなどなく、統治するには全く困難な人々である。アフガニスタンの発展のためには教育、郵便制度、軍隊の整備といった近代化はぜひ必要である。私はそれを誰よりも望んでいる。しかし、我が息子よ、孫よ、急激な変化は国を混乱に陥れる。決して早まってはならない」と遺言しています。1901年の出来事です。

この遺言は、21世紀の現代においても明らかに生きている、と私は考えます。言い換えますと、この遺言を守った統治者だけが、アフガニスタンを統治することができる。その逆の政策を実施した場合には、政治的混乱が生まれると考えられます。

そのいくつかの例をお話したいと思います。

(2) 国外追放になった独立の英雄

1919年、アフガニスタンで、アブドウル・ラフマーン国王の孫であるアマヌッラー国王が即位しました(さきほどの図ではアブドウル・ラフマーン国王の左側にいます)。彼はアフガニスタンの歴史の中で最も英明高く著名な国王です。

彼は大英帝国に対して独立戦争を挑み、独立を獲得しました。アマヌッラー国王は、一躍英雄になりました。今でもアマヌッラー国王の近代化政策が成功していれば、アフガニスタンは日本と同じように近代国家であっただろう、と語る人が多いです。

アマヌッラー国王は欧州を視察し、国の近代化の必要性に目覚め、古い因習と伝統にとらわれた人々を覚醒させ、それらから解放して、大改革を断行しようとしています。

彼が最初に行ったことは、欧州視察中に、同行していた王妃ソラヤのチャドー

ル（被り物）を取り外させたことでした。ところがその行動はたちまち本国に伝わり、国王は王妃の被り物を取り外して顔を異教徒に晒した、これは国王が異教徒になった徴である、と人々の噂となります。国王による新たな近代化政策は、効果を現すどころか、逆に反乱が勃発しました。異教徒の国王を戴くことなどできないとして、宗教指導者も反乱軍に加わり、異教徒を追い払え、とイスラームの聖戦が宣せられます。10年後の1929年、国王は国を追われる結果になりました。

アマヌッラー国王は、祖父アブドウル・ラフマーン国王の遺言を無視した近代化政策を講じたために、英雄から異教徒へ転落してしまいました。悲劇の国王は祖国に戻ることなく、異郷の地で客死します。

（3）1978年のクーデターで見たもの

アフガニスタンでは結婚する場合、夫となる男性が花嫁の家族に多額の婚資を支払う習慣があります。この婚資が多額に及ぶことから、「女性を売買している」と考える人々もいました。また、婚資が払えずに一生結婚できない男性もいたと聞きます。

このことに関して二つの事例をお話します。

1978年、アフガニスタンでは、共産主義者によるクーデターが勃発しました。約40年間に及ぶアフガン紛争の発端となった事件です。クーデターによっ

て政権を奪取した共産主義政権は、次々と新たな政策を実施します。その中に、先ほど述べた多額の婚資による結婚の禁止がありました。

新しい法律は、結婚の届け出費用として役所に300アフガニーを納めれば、自由に結婚できるというものでした。300アフガニーは、確か当時15米ドル前後だったと思います。この法律によって、男女は貧富の差なく、多額の婚資を支払うこともなく、両性の合意があれば、誰に束縛されることなく自由に結婚できることになりました。私も当時、アフガン男性に非常に同情していましたので、大変結構なことだと思いました。

そんなある日、友人と二人でカーブルの街を散歩していたところ、女性たちのデモ行進に出会いました。多くの女子学生らが小さな赤旗を振って、「新しい婚姻法制定を歓迎する。多額の婚資による女性の売買が禁止された」とスローガンを声高に叫んでいました。沿道には、チャドールを取った女性たちのデモを見るために、男性も詰めかけていました。デモ隊の女性たちが「新婚姻法万歳。300アフガニーで結婚が可能になった」と叫んだところ、私の近くにいた男性の一人が「女性の価値が300アフガニーに下落したのか？」と声をかけました。その時、女性たちは大きな戸惑いを隠すことができませんでした。周りにいた男性たちはそれを見て大笑いしました。中には「女性お一人、お値段300アフガニー」と冷やかす連中もいました。

私はその時初めて、アフガニスタン社会における多額の婚資は、女性の売買

といった意味ではなく、婚資の多寡によって嫁ぎ先における花嫁のステータスが決まるのだと知りました。つまり、娘に嫁ぎ先で肩身の狭い思いをさせないために、多額の婚資を相手に求め、それほど価値のある娘（花嫁）を大事にしてもらう、という意図があったことに気がつきました。

そのためアフガニスタンの一般市民は、新婚姻法によって女性の価値が300アフガニーになったと認識したのです。特に名誉を重んじる部族民たちにとって、娘を300アフガニーで嫁がせることなど言語道断です。

さらに、新政権はソ連との間に女子留学生派遣を決定したと発表しました。それに対して国民は、新政権がアフガン女性を異教徒や異国に売りさばいている、あるいはイスラームを改宗させて無信心者にしようとしている、そのために留学させるのだ、と噂しました。

それにもかかわらず新政権は急進的な政策を次々に打ち出し、急激な変化を国民に求めました。こうした新政権のやり方に対し、国民は激しく反発・抵抗し、イスラームの聖戦が叫ばれました。その結果、ソ連の軍事侵攻という事態を招くことになったのは、皆さんもご承知の通りです。共産主義を標榜した新政権は、まさしくアムヌッラー国王と同じ過ちを犯したわけです。初代大統領、タラキー大統領（さきほどの図では、右上にいる人物です）は、一年ほどで暗殺されました。

(4) ザン・ザル・ザミーン (女性・金・土地)

私は時折、「アフガニスタンとはどんな社会ですか」と訊かれることがあります。「大変興味深い、多民族による複雑な社会です」と答えますが、なかなかイメージとして浮かんでこないのか、首を傾げられてしまいます。そこで、「典型的な男性社会です」と答えると、何とか納得してもらえます。

アフガニスタンを語る上で、「3Z (スリーゼット)」という重要な言葉があります。ペルシャ語の三つの単語、ザン、ザル、ザミーン (Zan, Zar, Zamin) の頭文字がみなZなので、3Zと呼んでいます。この3Zは、私たちにいろいろなことを教えてくれます。単語のザンは女性、ザルは金、ザミーンは土地です。この3Zは、アフガン男性にとって大変重要な意味を持ちます。それは、財産を意味するからです。

19世紀にアフガニスタンで生活した英国軍人は「アフガン人と友情を結ぶ際には何が大事か。それは3Zに一切関与しないことである。もし関与したら友情を結ぶどころではなく、彼はあなたを殺しに来るだろう。しかしこの3Zに関与しなければ、命まで投げ出してくれるほどの素晴らしい友情関係を結ぶことができるのがアフガン人でもある」と述べています。

アフガン男性は、この世に生を受けたその瞬間からこの3Zを守ることを義務づけられます。つまり父祖から受け継いだ財産をさらに拡大、再生産するこ

とが義務、あるいは使命とされるのです。その中でザン（女性）は、他家との婚姻を通じて財産を守護し、拡大するための有効な資源です。特に部族社会ではその傾向が強く出ます。そのため女性は、厳しい監視下に置かれることになります。

パシトゥーンワリーという部族の掟には、名誉を守ることが義務として挙げられています。それゆえアフガニスタンでは、妻が見知らぬ男性と声を交わただけで、名誉を守るため夫が妻を射殺する、という事例があります。また、財産である女性の名誉を守るために相手の男性を殺害する、という事件も起きます。私がカーブル大学で学んでいた折にも、男子学生から「アフガン女性に手を出したら殺すぞ」と脅されたことがありました。もともと、私の後に留学してきた日本人男子学生はアフガン女性と結ばれています。

（5）女子教育は社会変革を伴う

このようにアフガン社会における女性の立場は、他の国とは大変様相を異にしています。このような男性中心の社会における女子教育は、アフガン社会に革命の変革を求めるものと言っても過言ではありません。それほどに女子教育は困難な事業であると言えます。具体的にどれほど困難であるか、いくつかの例をお話します。

先般、アフガニスタンに出かけた折、私の後任の鈴鹿光次大使から、日本に

留学した女子学生を呼んで帰国留学生の会を催すのでぜひ来てほしい、とお誘いをいただきました。その会で、ある女性に「あなたのお父さんの職業は何ですか?」と尋ねたところ、彼女は「私の父は小さなお店を持っていて、小売業を営んでいます」と答えました。そこで私は彼女に「娘さんが日本で修士号を取って、今は政府機関で働いているのですから、ご両親は大変ご満足でしょう」と言ったところ、彼女は「違います。父からは、おまえは日本に留学して修士号を取ったけれども、異教徒に成り下がり、家門の恥だと言われます」と言いました。そして「確かに私はお祈りをあまりしなくてもいいけれど、イスラーム教徒であり、異教徒ではありません。でも父はそう言って私を非難するのです」と続けました。

もう一人の女性は、女性に教育などいらないと言う父親に反発し、家出をしてまで教育を受けたと語っていました。アフガン社会は、家族の絆が大変強いのです。家族から見放されて、女性が一人で生きていくことは、とても困難です。日本に留学し、政府機関に勤め、立派に成功したと思われる女性たちにも、このように様々な困難が立ちはだかっています。

こんな話があります。欧米の人権擁護機関がアフガニスタンでも活動しています。ある時、家庭内暴力があまりに酷いとの訴えを受け、話を聞いた欧米人女性が、被害者のアフガン人女性に同情して、「そんなに酷いことをするなら離婚する、と言ったら少しは暴力も減るのではないですか?」と助言したそう

です。そこで彼女は家に帰ってご主人に「こんなにひどい待遇を受けるなら離婚したい」と言ったところ、「よしわかった。今すぐ離婚してやる。さっさと出ていけ!」と、着の身着のまま、家から追い出されてしまったそうです。彼女は助言した欧米人のところに来て「あなたの言った通りにしたら、どこにも行くところがなくなってしまった。子どもも取り上げられて、私はこれからどうしたらいいの」と、泣きじゃくっていたそうです。

この話をしてくれたアフガン人の古老は「国際社会はアフガニスタンを支援するために来てくれたと考えていた。しかし欧米人は、自分たちの価値観を押しつけようとしているだけではないか。民主主義をはじめ、人権擁護、女性権利擁護等、まるでアフガニスタンを未開の土地と思っている。男性が優位な社会において、女性に欧米の知識を与えても、新たな悲劇を生むだけだ。男性の考え方を変えない限り、アフガン社会を変革することなどできない。アフガニスタンにはアフガニスタンの慣習としきたりがある。それを無視して強引に事を運ぶやり方は、アフガン社会に新たな問題の種をまき散らしているだけ過ぎない」と述べていました。

(6) 2002年以降のアフガニスタン

それでは2002年以降のアフガニスタンは、どのように変化したのでしょうか。アフガニスタンには、多くの学校が建設されました。しかしその実態は、

腐敗や汚職が進んだだけで、大きな変化が現れたとは思われません。教育は就職するための切符であり、それ以外の何物でもありません。教育は単なるビジネスと化しています。欧米の大学を卒業した学生は、高額の給与と管理職のポストを要求します。さる大臣は私に、「日本に留学した学生は、欧米に留学した学生と違ってこうした要求をせず、まじめに働いてくれるので、大変助かっている」と語りました。

より悲惨なことは、アフガニスタン社会に麻薬が徐々に広がり始めていることです。ソ連軍が侵攻する以前は、アフガニスタンにヘロインや麻薬といったドラッグはありませんでした。しかし2002年以降、急速に広がっています。カーブル市内には、プレ・ソフターという橋があります。「焼け橋」と訳すことができるこの橋の下には、多くの麻薬常習者が生活しています。2002年以前には考えられなかったことです。

さらに恐ろしいのは、女性の間にも麻薬が広がっていることです。特に読み書きができない女性の間に広がっていると聞きます。ヘロインの恐ろしさを知らずに、夫に勧められるままにヘロインの常習者になってしまう。母親が麻薬常習者になることは家族の崩壊を意味します。今や女子教育の重要さは、社会の変革の域に留まるものではありません。健全な社会の構築と、社会の崩壊を防ぐためにも、大変重要なことです。ちなみに私が一年前に離任した時、その橋の下にいる女性の麻薬常習者は一人か二人でしたが、一年後の今では十数人

いると聞いています。

タリバーンが政権を掌握していた時代に、私はさるタリバーン特使と懇意になりました。懇意になったからといって、相手の家族構成について、特に家族の女性について尋ねるのは、先にも述べたように禁物です。パシュトゥーンワリーの掟の中に、「ノムース (Nomus)」「(名誉、誇り)」といった概念があり、相手の家族や一族の女性成員に関する事柄に触れることは、彼の「名誉」を汚すことになるのです。「名誉」が傷つけられれば、当然恥辱をそそぐ必要が生じます。このようにアフガン人、特にパシュトゥーンの部族民にとって、「名誉」を守ることはアフガン社会で生きる上で大変重要な通念です。

ところが、そのタリバーン特使は私の家族構成について訊いてきました。アフガン人は常に対等な関係を相手に求めます。そこで私も彼に対等な関係を求めて、家族構成を尋ねました。すると彼は、「子どもが三人いる」と答えました。「複数の奥様がいるにしては、三人とはちょっと少ないですね」と言いますと、「妻は一人しかないのだ」と大笑いして、その後、嬉しそうに、「実は最近、婚約したばかりで、二人目の妻をもらうことになっている」と教えてくれました。さらに、「彼女は読み書きができるので、子どもに本を読んで聞かせることができるのだ」と自慢げに語りました。「今の女房に不満があるわけではないが、彼女は山出し (田舎者) で、文字も読めないのだ。彼女では子どもを教育することができない」と、まるで私に同意を求めているように言った

ので、私は一瞬吹き出しそうになりました。そして、実はタリバーンの一員ですら、心の中では女子教育が重要だと思っているのだということを確信しました。

アフガニスタンに必要な教育は、私利私欲に走る人物の育成ではなく、国の復興に役立つ人材の育成です。紛争を終焉させ、硝煙の中から立ち上がって、平和構築に挺身する人材の育成が必要です。さもないければ、真の和平と国の建設を行なうことはできません。しかし残念ながら、アフガニスタンにおける教育の実態と現実とは、そうした理想から程遠いと言わざるを得ません。

(7) アメリカン大学襲撃事件の真相

ここでもう一つ、アフガニスタンの首都カブルにあるアメリカン・ユニバーシティーの話をしていきます。今やカーブル大学を抜いて、欧米の知識を習得したい人が通う、アフガンの若者の誰もが憧れる大学です。欧米の教授陣に加え、欧米で博士号、修士号を取得したアフガン人が教鞭を執っています。大学のキャンパスは、欧米のキャンパスとほとんど変わらない雰囲気、アフガニスタンに 있는ことを忘れさせます。まさしく異質な空間と言ってもいいと思います。

私の在任中、このアメリカン・ユニバーシティーは何度か襲撃を受けました。大学の欧米人の教師が帰宅途中に誘拐され、未だ解放されていません。また、武装集団が大学構内に侵入して、無差別攻撃を仕掛けたこともあり、私

の友人の娘さんが通学しており、この事件に巻き込まれて負傷しました。幸いにも、死んだふりをして殺害されることは免れましたが、大学の構内に侵入したテロリストたちが構内を歩き回って学生を射殺するという、非常に悲惨で衝撃的な事件でした。

なぜこのような事件が発生したのでしょうか。反政府勢力は、なぜカーブル大学や他の大学ではなく、アメリカン・ユニバーシティーを襲撃して、学生たちを殺害したのでしょうか。

先ほども申し上げましたように、アメリカン・ユニバーシティーのキャンパスは、欧米のキャンパスとほとんど変わりません。男子学生と女子学生が仲良く懇談している姿があちこちに見られます。アメリカン・ユニバーシティーは、アメリカの文化がそのまま持ち込まれた場所と言ってもいいでしょう。男女交際も自由に行われていると聞きます。

こうした事実から明白になるのは、襲撃を実行した反政府勢力の人々は、西欧の文化、特に、欧米の男女関係を軽佻浮薄と断じ、アフガニスタンの文化と慣習にそぐわないものと感じていたということです。それ以上に、自国の文化と慣習が侵略されていると感じたものと思われます。

かつての日本にも「男女七歳にして席を同じゅうせず」といった考え方がありました。アフガニスタンも、慣習やしきたり、特に男女関係は厳しく律せられる社会です。同時にアフガニスタンでは、名誉を重んじるためには命をも軽

んずる、という風潮が色濃く残っていることは、先ほども述べた通りです。

アフガン人の古老は「古い考え方を遺物として排除するのは良くない」と言います。「接ぎ木をするにも、無理に接ぎ木をすると両方の木が枯れてしまう。枯れた木は、新たな問題を巻き起こす。接ぎ木は誰もが喜ぶように、上手に育てて、立派な果実を得なければ」と呟きました。「急激な変化は国を混乱に陥れる」と、かつてアブドウル・ラフマーン国王が遺言したことを思い出していただきます。

2. 提言

(1) 真の変革をもたらすには

現在のアフガニスタンは、暴風雨の中に漂う箱舟のようです。因習や慣習という名の下に暴風雨が荒れ狂い、新しい文明という大波と激しくぶつかり荒れ狂う中、最新の羅針盤によって船乗りが暴風雨を乗り切ろうとしています。そのそばでは乗客が船乗りの袖をつかんでこちらがいい、あちらがいい、と右往左往して叫んでいます。船乗りの中には沈没することを見越して、密かに救命ボートを持ち出して逃げ出そうとしている連中もいます。パニックになっている人々の中にあつて、盗みを働く人々もいます。あるいは、暴風雨が立ち去るのを一心に神に祈っている人々もいます。しかし、暴風雨は永遠に続く訳で

はありません。こうした危機を防ぎ、国難に対処するためには、人材育成しかないと考えます。

教育は、国家百年の大計です。特にアフガニスタンにおける女子教育は、大きな社会変革をもたらすだけに、一步一步確実に、そして地道に実施することが必要です。真の社会変革をもたらすための女子教育が実施されるべきであると思います。

(2) 和魂洋才の知恵に学ぶ

これまで述べてきましたように、アフガニスタンにおける女子教育は、大きなリスクを伴います。この高いハードルをどのようにして越えるか。容易なことではありません。

アフガニスタンと同様に、日本もかつては西洋文明の嵐に出会い、その衝撃は並大抵のものではありませんでした。しかし、先人はその嵐を「和魂洋才」という知恵で上手く乗り切りました。

アフガンの古老は、接ぎ木の話をしてくれました。アフガニスタンにおいても、土着の魂と西洋のテクノロジーを繋いで、立派な木に育てるための努力と知恵が必要であると考えます。そこでアフガニスタンの女子教育の発展のために、和魂洋才に倣って具体的な提案をさせていただきたいと思っています。

(3) 女子大学創設

現在、アフガニスタンには女子教育のための大学はわずかしかなかった。私立大学の中に女子学部を創設した大学はありますが、社会変革を伴う女子教育を目指す女子大学は皆無です。そこで、アフガン女性のための、アフガン女性による、アフガン社会にマッチした女子大学の創設を提案したいと思っています。こうした女子大学の創設によって、女性を外国に留学させなくても国内で教育することができるようになります。両親が安心して娘に高等教育を受けさせられるような環境を整えることが、アフガニスタンにおける女子教育を大きく前進させる第一歩だと考えます。

女子大学創設には、教員養成が必須です。この教員養成には、明治以来日本の女子教育をリードしてきた日本の女子大学がその経験を生かし、どのような女子教育がアフガニスタンでは受け入れ可能か、アフガン女性と手を携えて考えていくことが重要です。

その中で最も大切なことは、アフガン社会の中で最も保守的で、保守層に絶大な影響力を有する宗教界を巻き込むことです。アフガン社会に変革をもたらすためには、宗教界や保守層の人々と対話しながら、その道筋を深めていく、探り当てる必要があると思います。

もちろん、大学教員の養成だけではなく、教員及び学生が直面する問題に対

して、和魂洋才の知恵を働かせて、一つ一つ確実に解決していくことも重要です。たとえ長い時間がかかっても、これがアフガニスタンの女子教育を成功させる方法であると思います。こうした女子教育によって初めて、アフガニスタンの明るい未来を築くことができると確信します。

最後に、アフガニスタンの未来を築く女子教育のために、ここにお集まりの女子大学の関係者の皆様に、協力の第一歩を踏み出していただきたいとお願いして、終わりとさせていただきます。ありがとうございます。

「アフガニスタン女子教育の実際」

アフガニスタン・イスラム共和国女子留学生プレゼンテーション

卒業生ビデオメッセージ

ファシリテーター…青木 健太

お茶の水女子大学グローバル協力センター 特任講師

Girls' Education in Afghanistan



Mehrafoon Faqiryar
Samira Jafari
Tahmina Amani

ファシリテーター…青木健太（グローバル協力センター特任講師）

このパートでは、本学で学ぶアフガニスタン女子留学生よりアフガニスタンにおける女子教育の現状、課題、そして今後の展望について発表いたします。また母国に戻り、教鞭をとる卒業生からのビデオメッセージを上映いたします。まず、アフガニスタン女子留学生からのプレゼンテーションです。発表資料は、

の三人が準備いたしました。本日の発表者は、本学理学専攻化学・生物化学コース博士後期課程三年の

それでは、

さん、よろしく願いいたします。

です。

Girls' Education in Afghanistan（アフガニスタン女子教育の実際）

皆さん、こんにちは。ー私の日本語でのプレゼンテーションは以上です。

ここからは、英語でお話しさせていただきます。本日は、このシンポジウムに参加し、素晴らしい方々に混じってお話しする機会をいただきましたことを大変嬉しく、光栄に思います。私からは、アフガニスタンにおける女子教育の現状について手短にお話しいたします（図1）。

Contents

- Background
- Basic Education
- Statistics of 2016 & 2017
- Higher Education
- Obstacles to Girls Education

Background

3 decades of conflict devastated Afghanistan's education systems and institutions. Under the Taliban, the majority of girls' schools were closed and gross enrolment fell from 32% to just 6.4%. In 2002, only almost 1 million children, mostly boys, attended school while, girls were completely excluded from educational opportunities.

Background

After fall of Taliban, thousands of primary and secondary school teachers were trained, tens of millions of textbooks were produced and distributed. Thousands of Afghan girls and boys in remote provinces started to attend community-based education classes. Afghan government with the help of donors designed the systems and infrastructure in order to administer a nationwide education system.

1. 背景

アフガニスタンにおける30年以上に及ぶ紛争は、国内の教育制度および教育機関を壊滅させました。タリバン政権下では、大多数の女子が学校に通うことができませんでした。私もそのうちの一人です。5年間、学校へ行くことができず、家で『シャー・ナーメ(王書)』を読んでいた。

残念なことに、この間に総就学率は32%から6.4%にまで落ち込みました。2002年に学校に通っていた子どもはわずか百万人ほどで、そのほとんどが男子でした。女子には全くといっていいほど教育の機会が与えられていませんでした(図2)。

タリバン政権崩壊後、数千人の小、中学校の教員が養成され、数千万冊に及ぶ教科書が印刷、配布されました。そして地方に暮らす数千人の少年少女達が、各地域に設置された学校に通い始めました。アフガニスタン政府は、ドナーやUSAID (United States Agency for International Development 米国国際開発局) から援助を受け、教育制度を再建し、アフガニスタンじゅうの子ども達が教育を受けられるようにしようと尽力しました(図3)。

今日のアフガニスタンの識字率を見ると、十代では、男

In Afghanistan, only 37 percent of adolescent girls are literate, compared to 66 percent of adolescent boys. Among adult women, 19 percent are literate compared to 49 percent of adult men. (HRW 2017:8)

Basic Education

Statistics on the number of children in and out of school in Afghanistan vary significantly and are contested. Statistics of all kinds even basic population data are often difficult to obtain in Afghanistan and of questionable accuracy.

A 2015 Afghan government report stated that more than 8 million children were in school, 39 percent of whom were girls. In December 2016, the minister of education announced that the real number of children in school was 6 million.

In April 2017, a Ministry of Education official told Human Rights Watch that there are 9.3 million children in school, 39 percent of whom are girls. (HRW 2017:7)

子が66%なのに対し、女子はわずか37%です。成人にいたっては、男性が49%、女性ではたった19%です(図4)。

2. 基礎教育ー2016年・2017年の統計資料よりー

アフガニスタンの就学率は、統計データによってかなり数字にばらつきがあり、必ずしも正確とは言えませんが、2017年の就学率報告書によれば、アフガニスタンでは現在、930万人の児童が就学しており、うち39%が女子です(図5)。

2016年・2017年の統計資料によると、USAIDによりアフガニスタン各地域に4055か所の学校が設置され、地方に暮らす11万9千人の子どもが教育を受けられるようになりました。そのうちの5万8千人以上が女子です(図6)。

さらに、USAIDは、初等教育の段階で学習を中断することを余儀なくされた少年少女のために、2437校の学習促進センターを開設しました。現在、同センターには、約4万9千人が生徒として登録しており、その内訳は女子が2万3千人、男子が2万6千人となっています。

Basic Education Statistics in 2016 & 2017

4,055 community-based education classes were established by USAID ensuring over 119,000 children in rural areas, including over 58,000 girls, have access to education (USAID 2017:3)

Basic Education Statistics in 2016 & 2017

- 2,437 Accelerated Learning Centers were established by USAID for students who experienced interruptions in their early education; over 49,000 students have enrolled at these centers, including over 23,000 girls and 26,000 boys
- over 17,000 school principals and administrators, including over 3,000 females, were trained in basic school management
- 47.7 million textbooks were printed and distributed (USAID 2017:3)

An estimated 40 percent of all school-age children in Afghanistan do not attend school (UNICEF 2016)

また、女性約3千人を含む1万7千人以上の学校教員および管理職の人々が

基本的な学校運営の方法についての研修を受けました。さらに4770万冊の教科書が印刷・配布されました(図7)。

しかし、残念ながら、今日でも学齢期の子どものおよそ40%が学校に通っていないと言われています。不就学児の多くは働いていて、一家の主たる稼ぎ手として家族を支えています。父親が内戦中に亡くなったり、または身体に障害を負ったり、もしくは失業中であるため、彼らが働かなくてはならないのです。もちろん学校には行けません(図8)。

女子の場合には、3分の2が就学していないと推定されています。治安の悪化に伴い、女子が学校に通うことがさらに難しくなっています。他にも女子の就学には多くの困難が立ちはだかっています(図9)。

たとえば、私の実家の隣人夫妻には三人の娘がいましたが、私が2か月前に帰国した時には、一人が亡くなっていました。通学途中に自爆テロに巻き込まれ、命を落としたのです。それがきっかけで、隣人夫妻は他の二人の娘に学校を辞めさせました。同じような形で残された娘たちまで失うことを恐れたからです。

an estimated two-thirds of Afghan girls do not go to school And as security in the country has worsened, the progress that had been made toward the goal of getting all girls into school may be heading in reverse (HRW 2017:7)

Forty-one percent of all schools in Afghanistan do not have buildings and administrative barriers and corruption are the main reason

Many children live too far from the nearest school to be able to attend, which particularly affects girls (HRW 2017)

Higher education

In 2001, only 1 percent of college-age students were enrolled in higher education, among the lowest percentage in the world. Currently, approximately 9.6 percent of college-age students--around 300,000 students--are enrolled in public and private universities, including around 100,000 women (USAID 2017:2)

別の問題もあります。5、6年前のことになりますが、ある地方で、女子教

育に否定的な考えを持つ人々が、女子校の飲料用水源に毒物を混入したのです。

汚染された水を飲んだ女子生徒たちが死亡したり、病院に運ばれたりする事態

になりました。入院した少女の何人かは、有毒な水によって脳に深刻な機能障

害が残り、回復することはありませんでした。

他にも問題があります。アフガニスタンの学校の41%は校舎がありません。

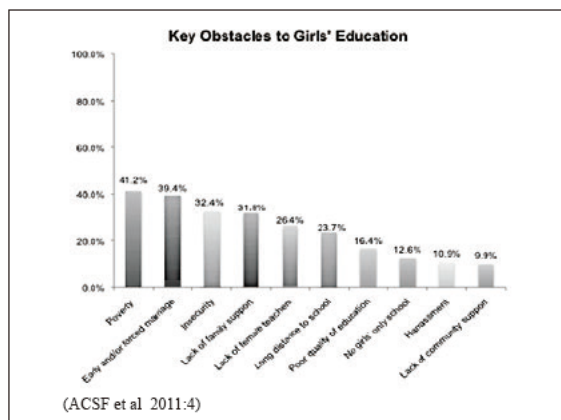
これは、主に行政上の問題と汚職が原因です。また、家から一番近い学校まで

かなり距離があるため、実際に通うことができない子どもも沢山います。特に

女子の場合は、遠距離通学は困難です（図10）。

3. 高等教育

高等教育に関しては、2001年には、高等教育を受ける年齢に達した子のうち、大学に通っていたのはわずか1%にすぎませんでした。これは世界で最低の数字でした。現在では、およそ9.6%、約30万人が公立、私立大学で教育を受けており、この中には女子学生も10万人ほど含まれています。実際問題として、9.6%という数字は、依然として、世界で最低レベルではないかと思っていますが……（図11）。



4. 女子教育の主な障壁

このグラフは、女子教育の主な障壁をまとめたものです（図12）。貧困、早婚・強制婚、治安の悪さ、家族からの支援の欠如に続き、女性教員の不足が挙げられています。多くのアフガニスタン人は、学校に女性教員がいなければ娘を就学させない、という話を聞いたことがあります。

また、家から学校までが遠いうえに、バスや車が不足しているために通学が困難なことが挙げられます。中には、娘を遠くの学校に徒歩で通学させるまでに社会を信用できない、という家族もあります。

さらに、教育の質の低さという問題もあります。また女子が学校に殆どいないため、お互いにサポートしあうことができません。女子に対するハラスメントも非常に深刻です。女子教育に対する地域の理解や支援も欠けています。アフガニスタンには今でも、女子や女性が学ぶこと、働くことを尊重しない人々がたくさんいるのです。

今、お話ししました通り、残念ながら、アフガニスタンの教育の再建には、まだ多くの課題が残されているのが現状です。

しかしその一方で、たくさんの方々の素晴らしい方々から、アフガニスタンの女子教育に多大なご支援をいただいています。お茶の水女子大学で博士号を取得した留学生たち、グローバル協力センターのスタッフの方々、私の指導教官であ

<Reference>

- ACSF et al., *High Stakes: Girls' Education in Afghanistan* February 2011, <https://www.oxfam.org/sites/www.oxfam.org/files/afghanistan-girls-education-022411.pdf>, accessed on 20th November 2017
- Human Rights Watch (HRW), *I Won't Be A Doctor and One Day You'll Be Sick: Girls' Access to Education in Afghanistan*, October 2017, https://www.hrw.org/sites/default/files/report_pdf/afghanistan1017_web.pdf, accessed on 20th November 2017
- UNICEF, Press release: One in four children in conflict zones are out of school, 12th January 2016, https://www.unicef.org/media/media_89782.html, accessed on 20th November 2017
- U.S. Agency for International Development (USAID), *USAID Afghanistan Education Fact Sheet*, October 2017, https://www.usaid.gov/sites/default/files/documents/1871/FINAL-Education-10_10_2017.pdf, accessed on 20th November 2017
- Interviews with teachers at local schools

Although there are many barriers on the way of girls' education in Afghanistan but there are also people who are working hard for improvement of girls' education

る森先生をはじめ、皆様が本当に一生懸命取り組んでくださっています(図13)。私の発表はそろそろ終わりますが、最後にこの場をお借りして、15年間にわたりアフガニスタンの女性に日本で教育を受ける機会を与えてくださいました、日本と日本のすべての大学、特にお茶の水女子大学とグローバル協力センタに感謝の意を表したいと思います。特に、指導教官の森先生は、十数名に及ぶ留学生全員に親身に接し、励まし、指導してくださっています。私を温かく受け容れてくださる救世主であり、本当に素晴らしい方です。ありがとうございます。

ファシリテーター…

さん、どうもありがとうございました。

続きまして、卒業生からのビデオメッセージの上映です。本日のアフガニスタン女子教育支援15周年記念公開シンポジウムに合わせまして、現地からメッセージを寄せてくださいました。どうぞご覧ください。

ビデオメッセージ

卒業生

※シンポジウム会場では、約10分間、卒業生、並びに、その教え子達から寄せられたビデオメッセージが上映され、現在の状況について報告がされる

とともに、謝意が示された。

ファシリテーター… 日本に留学した後、母国に戻り、後進の育成のために教鞭をとる卒業生の姿に、希望を見るような思いがいたします。なお、ビデオに登場した卒業生の他にも卒業生がおりますことを、付け加えさせていただきます。

さん、 さん、 さん、そしてこの場にはいらつ
しゃいませんがメッセージを寄せてくださった卒業生の皆様、学生の皆様、本
当にありがとうございます。

皆様、発表者にもう一度盛大な拍手をお願いいたします（一同拍手）。
以上で発表を終わります。

「アフガニスタン女子教育支援の15年間」

室伏きみ子氏 お茶の水女子大学長



1970年お茶の水女子大学理学部生物学科卒業。

1972年同大学院理学研究科修士課程修了、理学修士。

1976年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了、医学博士。

専門は細胞生物学、生化学、科学教育。

お茶の水女子大学助手、講師、教授、理学部長、理事・副学長を経て2015年4月から現職。

1999年および2005年にルイ・パスツール大学にて客員教授。

社会活動として、日本学術会議会員（現在は連携会員）、文部科学省・経済産業省・内閣府等の審議会委員、（株）ブリヂストン社外取締役、日本放送協会経営委員会委員、日本医療研究開発機構監事、国立大学協会副会長等。2013年フランス共和国教育功労賞（シュヴァリエ）受章。

本日のお話

- (1) アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯
⇒五女子大学コンソーシアム協定の締結へ
- (2) 五女子大学コンソーシアムの取組み
- (3) お茶の水女子大学としての取組み
- (4) 今後に向けて

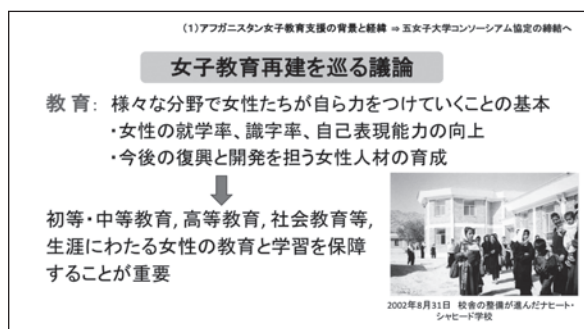
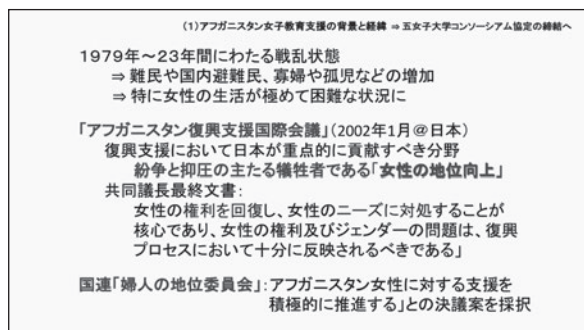
今、ビデオメッセージを寄せてくれた卒業生たちのキラキラと輝いている姿を見て、このうえなく嬉しい思いに包まれております。少し時間をいただいで、五女子大学コンソーシアム、そして、お茶の水女子大学の、これまでのアフガニスタン女子教育支援の足跡についてご報告させていただきます（図1）。

1. アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯

最初にアフガニスタン女子教育支援の背景と経緯、そして、五女子大学コンソーシアムの協定が結ばれるに至ったいきさつにつきまして、簡単に説明をさせていただきます。

アフガニスタンでは、1979年から23年間にわたって戦乱状態が続いたことにより、多くの国民が難民や国内避難民となり、寡婦や孤児が増加しました。特に女性の生活が極めて困難な状況になったことは、先ほど皆様がおっしゃったとおりです。

2002年1月、日本におきまして、「アフガニスタン復興支援国際会議」が開催され、今後の復興支援において日本が重点的に貢献すべき分野として、紛争と抑圧の主たる犠牲者である「女性の地位向上」が挙げられました。共同議長の最終文書にも「女性の権利を回復し、女性のニーズに対処することが核心であり、女性の権利及びジェンダーの問題は、復興プロセスにおいて十分に



反映されるべきである」と記載されています。

国連婦人の地位委員会(CSW)におきましても、「アフガニスタン女性に対する支援を積極的に推進する」との決議案が採択されました(図2)。

皆様にご説明するまでもないことですが、女性の地位向上、すなわち様々な分野で女性たちが自ら力をつけていくための基本は教育です。これは、どこの国でも認識されていることだと思います。

アフガニスタンの復興支援においても女子教育の再建が重要視され、様々な議論がなされました(図3)。まずは、女性の就学率、識字率を上げ、自己表現能力を向上させる。そして、今後の復興と開発を担う女性人材を育成していく。そのためには、初等・中等教育、高等教育、社会教育等、生涯にわたる女性の教育と学習を保障することが極めて重要である、ということ、具体的には次の6点を柱とした教育支援を行うことになりました。

1 施設・設備及び教材の整備

2 女子が学ぶことに理解のない親に対する啓発促進

3 教員の養成・再教育等の支援

4 初等・中等教育課程における指導的女性教員の日本における研修

5 校長、教育行政に関わる人材の学校経営等に関する研修

6 高等教育課程における女性教員・学生の留学生としての受け入れ

これからお話しする五女子大学コンソーシアムでは、この中の4から6に特に力を入れてまいりました。

先ほどの遠山敦子様のメッセージにもありましたとおり、2002年1月に、遠山文部科学大臣と本学の本田和子学長が会談をされました。その時、遠山大臣から「お茶の水女子大学はアフガニスタンの女子教育支援を手伝いますか？」というお問い合わせがあり、本田学長は、即座に「やります」とおっしゃいました。私は、少しびっくりしたのですが、本田学長の行動は迅速でした。

大学に戻るとすぐに「お茶の水女子大学はアフガニスタン女子教育に協力する」という決意表明をされました。多くの教職員の反応は、「アフガニスタンってどこにあるんだ?」「そんなことをやってどうなるんだ」「この時期にそんな大変なことをするのはどうかと思う」というもので、反対の声を上げる方も少なくありませんでした。けれども、一方で、「ぜひやりましょう」「社会のために私たちは役に立ちたい」とおっしゃって、参加してくださった方もたくさんいらっしゃいました。その多くは女性教員でした。

(1)アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯 ⇒ 五女子大学コンソーシアム協定の締結へ

2002年1月遠山敦子文部科学大臣と本田和子 本学学長との会談
⇒アフガニスタン女子教育支援に関する検討を開始

- WG : JICA、NGO等から専門家を招いてリサーチ開始
- アフガニスタンで女子教育に携わる指導的教員・教育関係者を招いて研修を実施するプログラムを策定
- 女子教育の先進国として、アフガニスタンの女子教育支援を実施するために
2002年4月12日に5女子大学の学長会議を開催
5月17日に五女子大学コンソーシアム協定締結



ワーキンググループが本学の中に立ち上げられ、JICA、NGO等から専門家を招いてリサーチを開始しました。そして、アフガニスタンから女子教育に携わる指導的教員・教育関係者を招いて、研修を実施するためのプログラムを策定することになりました。

しかしながら、これはとても本学だけでできる事業ではありません。そこで本田先生は、当時親交のあった四つの女子大学の学長の方々に自ら電話をかけて、「女子教育の先進国として、共にアフガニスタンの女子教育支援をしていきましょう」と呼びかけられました。そして皆様のご同意を得て、五女子大学コンソーシアムが結成される運びとなったのです(図4)。

2002年5月17日に、「五女子大学コンソーシアム協定」が締結されました。これはその時の協定書とそこにサインをなさった五人の学長です(図5)。先ほど、今岡先生のお話にもありましたとおり、この時は、五女子大学の学長が全員女性で、それぞれの大学の卒業生でした。歴史的に見てもこういうことはあまりないと思います。身長

図 5

(1)アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯 ⇒ 五女子大学コンソーシアム協定の締結へ

2002年5月17日五女子大学コンソーシアム協定締結 (2005,2011,2017年更新)

5つの女子大学が手を携えて、女子高等教育機関としての経験と知見を活用し、アフガニスタンの女子教育普及・発展に貢献するための国際協力活動を開始



(写真左から) 津田塾大学 志村尚子学長、お茶の水女子大学 本田和子学長、東京女子大学 渡辺子学長、奈良女子大学 月形雅子学長、日本女子大学 後藤祥子学長



の順に並ぼうと話し合われたかどうかは分かりませんが、皆で手を携えて、これからのアフガニスタン女子教育を支えていこうと決意された勇氣ある女性学長の方々の、その時の写真でございます。

実は、つい先ほど、五女子大学コンソーシアム協定を更新いたしました(図6)。このたびの学長の並び方が身長の順でないことはお分かりだと思いますが、この5人で、更新の協定書にサインをし、今後に向けてまた共に頑張っていこうと、決意を新たにしたところでございます。

2. 五女子大学コンソーシアムの取組み

五女子大学コンソーシアムは、様々なことに取り組みましたが、その中でも特に指導的女子教育者研修と女性教員研修の2点に力を入れてまいりました。

(1) 事前準備

まず、2002年に、文部科学省、JICAのご支援の下、事前調査団が派遣されました。先ほど津田塾大学の高橋学長からお話がありましたとおり、8名の方々が事前調査のために、アフガニスタンに出向かれたわけでございます。そして、アフガニスタン側に提示する研修プログラムの原案づくりが始まりました。

2002年(文科省、JICAの支援の下)

事前調査団派遣(8名)

⇒ 研修プログラムの原案作成

事前研修(7名):アフガニスタンから

責任者を招聘

⇒ 受け入れ大学の視察と
プログラムの検討

(2)五女子大学コンソーシアムの取組み

図8

アフガニスタン女子教育のための女性教員研修プログラム策定検討委員会

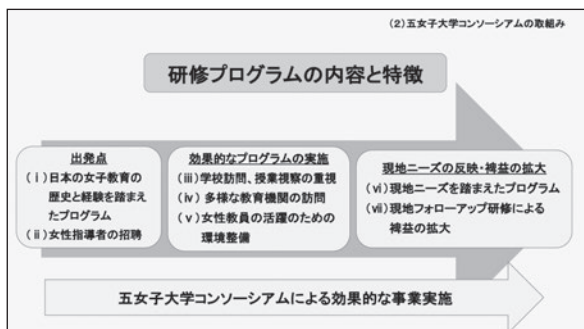
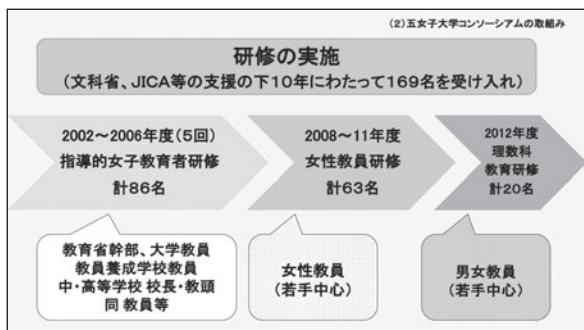
	氏名	所属	役職
1	藤枝 幸子	お茶の水女子大学理学部教授	委員長
2	内海 成治	大阪大学大学院人間科学研究科教授	副委員長
3	東宝 南由子	奈良女子大学理学部教授	—
4	長尾 真文	広島大学教育開発国際センター教授	—
5	黒田 一雄	広島大学教育開発国際センター助教授	—
6	國枝 マリ	津田塾大学文学部教授	—
7	西原 鈴子	東京女子大学現代文化学部教授	—
8	樋川 芳子	日本女子大学理学部教授	—
9	ナギ・アザイ・ヤール	アフガニスタン国際教育部長	—
10	田中 浩一郎	(財)国際開発センター・エスエムピー・環境衛生研究員	—
11	藤間 謙	ユニセフプログラム・コーディネーター	—
12	片山 信康	NGOワールドビジョン・ジャパン事務局長	—
13	佐藤 美子	お茶の水女子大学文学部教授(学長補佐)	—
14	長瀬 康子	お茶の水女子大学人間文化研究科教授	—
—	岡谷 重雄	文部科学省大臣官房国際課国際交流政策室長	オブザーバー
—	野田 亮二	外務省経済協力局技術協力課課長補佐	オブザーバー
—	鈴木 雅子	国際協力事業団 企画・評価部課長、女性課長	オブザーバー
—	宮川 めぐみ	(社)シンシティ国際ボランティア会	オブザーバー

2002年11月には、アフガニスタン側の責任者7名が事前研修のために日本においでになり、受け入れ大学の視察と研修プログラム原案の検討が行われました(図7)。

当時「アフガニスタン女子教育のための女性教員研修プログラム策定検討委員会」は14名で構成されました。本学の理学部教授で、当時、附属高等学校の校長も兼任していたらっしゃった藤枝修子先生を委員長として、大学教員10名、国際機関で活躍する専門家1名、NGOの専門家1名、アフガニスタン情勢に詳しい研究者1名、在日アフガニスタン人の教員1名でした。そこに文部科学省、外務省、JICA等の方がオブザーバーとして参加してくださり、様々な議論をしながら、アフガニスタンの女子教育に適した新しいカリキュラム、プログラムの策定を進めました(図8)。

(2) 研修の実施方法と特徴

実際に、どのような形で研修が実施されたかと申しますと、まず、2002



そして、効果的なプログラムの実施という点では、学校訪問ですとか授業の視察を重視いたしました。さらに、学校以外にも多様な教育機関を訪問していただきましたので、教育の色々な側面を知っていただくことができたのではないかと思います。その一方で、女性教員の活躍のための環境整備にも力を注ぎました。

年から2006年度は、5回にわたって指導的女子教育者の研修を行い、アフガニスタンから教育省幹部、大学教員、教員養成学校教員、中・高等学校の校長・教頭・教員、計86名を招聘しました。2008年度から2011年度にかけては、若手を中心に63名の女性教員をお招きして研修を行いました。2012年度には、理数科教員の研修ということで、やはり若手の方々を中心に、男性も含む20名をお呼びしました。結果として、10年間にわたり、169名の方々を受け入れて、研修を実施しました。(図9)。

この研修プログラムの特徴といたしましては、日本の女子教育の歴史と経験を踏まえてプログラムを策定したこと、そして、最初に女性指導者を招聘したことが挙げられます。

(i)日本の女子教育の歴史と経験を踏まえたプログラム作成

- 過去に日本が経験してきた女子教育における困難な経験の共有
- 女子の不就学の原因についての比較検討(親の意識、家事、貧困、早婚等)
- 戦後日本の教育再建の経験を共有(学校施設・設備の整備、教員の確保、教育の質の改善)

(ii)女性指導者の招聘

- 女子教育の再建においては、文化的な配慮からも、女性教員の役割が重要
- 女性教員の活躍のためには、教育行政、学校現場において、指導的な役割を果たす教員等の育成が重要

こうした支援はアフガニスタンの現状に即したものでなくては意味がありませんので、現地ニーズを踏まえたプログラム作りを心掛け、必要に応じて改善を加えるということをしてまいりました。そして、現地に行ってフォーアツプ研修を行うことにより、裨益の拡大を図ったわけです(図10)。

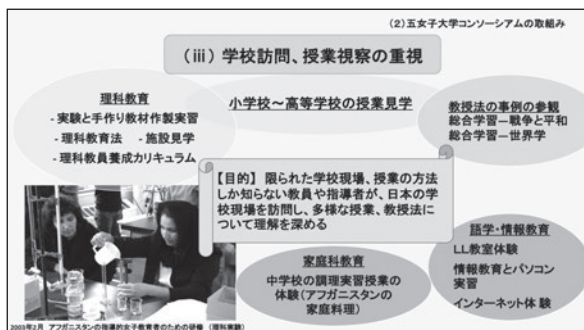
これらはすべて五女子大学コンソーシアムによる効果的な事業実施であったと考えております。参加してくださった先生方、そして省庁の方々は、非常に協力的で、高い志をもってこの事業にあたってくださいました。今思い起こしても、本当に胸が熱くなる思いがいたします。

ここで、今申し上げましたプログラムの特徴についてももう少し説明いたします。

(i) 日本の女子教育の歴史と経験を踏まえたプログラム作成(図11)

日本の女子教育は、その歴史の中で、就学率の低さ、教育の男女格差、戦禍など、様々な困難に直面し、一つ一つ乗り越えてきた経験があります。そうした経験を共有し、アフガニスタンの女子教育支援に活かすことができるのではないかと考えました。

例えば、女子が就学できない原因としては、親の意識、家事、貧困、早婚等が考えられます。そういった背景について、かつての日本の状況に照らして比較検討を行いました。また、学校施設・設備の整備、教員の確保、教育の質の



改善に関しては、戦後の日本の教育再建の経験を踏まえつつ、プログラムづくりを行いました。

(ii) 女性指導者の招聘

アフガニスタンの文化的な背景を考えると、女子教育を再建するためには、実際の現場で女子の教育にあたる、優れた女性教員を育成することが不可欠です。さらに、そういう女性教員に力を発揮していただけるような環境づくりも必要ですので、教育行政や学校現場において指導的な役割を果たす立場にある方たちを招聘して研修を行いました。

先ほどのビデオメッセージからもお分かりいただけただけですが、本学あるいは四つの女子大学で学んだ方々が、卒業後、母国に戻って、若い女性たちに夢を与える活動をしていらっしゃいます。その姿を拝見しながら、私たちの努力も実ったのかなと、目頭が熱くなる思いがいたしました。

(iii) 学校訪問、授業視察の重視 (図 12)

限られた学校現場、授業の仕方しか経験されたことのないアフガニスタンの教員や指導者の方々に、様々な授業、教授法があることを知っていただくことを主な目的として、研修プログラムには学校訪問を積極的に取り入れました。小学校から高等学校の理科、家庭科、語学・情報、総合学習などの授業を実際

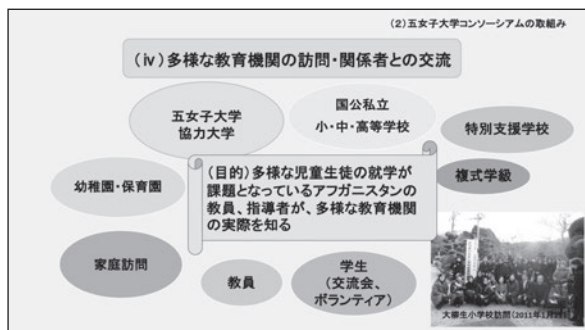


図 13



図 14

に見学したり、体験していただき、参加者にとっても喜んでいただくことができました。

(iv) 多様な教育機関の訪問・関係者との交流 (図 13)

アフガニスタンでは、多様な児童生徒の就学が課題となっていることから、五女子大学、国公立の小・中・高等学校以外の教育の現場を見ていただく機会も設けました。特別支援学校、幼稚園・保育園、複式学級、家庭などを訪問し、関係者の方々と交流して、様々な体験をしていただきました。

(v) 女性教員の活躍のための環境整備 (図 14)

先ほど、世の中を急に变えるのは大変だというお話がありました。たえそうであっても、アフガニスタンの女子教育を再建するためには、女性がリーダーシップをとって社会を変えていかなければなりません。そのためには、女性教員を育成するだけでなく、彼女たちが活躍できる環境を整えることも大切です。

そこで、指導的的女子教育者研修では、女性教員が活

(vi) 現地ニーズを踏まえたプログラム
(vii) 現地フォローアップによる裨益の拡大

2002年5月、8～9月 現地事前調査団

2002年11～12月 事前研修

2003年3月、4月、8月

現地フォローアップ研修:

ワークショップ開催、研修員面接調査、

第2回研修内容の改善

2003年5月、10～11月、2004年3月

教員養成に関する調査

2006年5～6月 「こころのケア」ワークショップ



躍でできるような学校運営の経験を共有したり、女性のリーダーシップに関する議論をしたりする場を設けました。社会や職場における女性の活躍、家庭内の役割・分担、生活改善と女性の役割、等をテーマとして、リーダーシップや男女ともに幸せな世界を作るためにどうしたらよいかということについて話し合っていました。

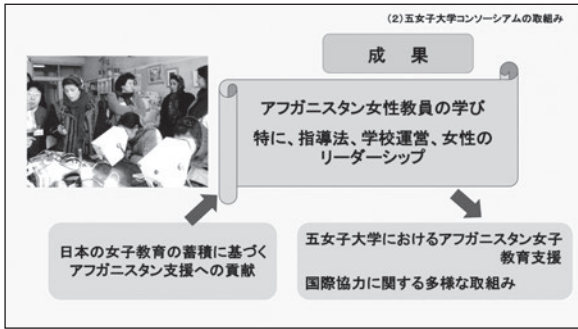
先ほどのビデオメッセージで、卒業生たちがそれぞれに自立し、主体的に人生を歩んでいる姿を見て、こういった研修も役に立ったのではないかなと思っております。

(vi) 現地ニーズを踏まえたプログラム (図15)

既にお話がありましたけれども、現地への事前調査団の派遣、事前研修、フォローアップ研修など行いました。教員養成に関する調査を行ったほか、ひどい社会状況の中で心を病んでしまった方もいらっしゃいますので、「こころのケア」のためのワークショップを開催したりしました。このことは後ほどあらためてお話します。

(vii) 現地フォローアップによる裨益の拡大

現地では、2003年に3回、ワークショップや研修員の面接調査を行いました。その後、アフガニスタンの政情が不安定になったため、こちらから行っ



てお手伝いすることはできなくなっていました。この点は残念ですが、日本にいらしてくださる方々に、私たちが持っている経験や知識などをお伝えすることを通して、少しずつ成果があがってきていると思っています。

(3) 成果と課題

こうした一連の取組みの成果といたしましては、アフガニスタンの女性教員の学びに貢献するとともに、五女子大学にとりましても、今後の国際協力を考えるうえで一つの契機となったということがございます。アフガニスタンへの女子教育支援をきっかけとして、各大学でさらに新たな国際協力に向けての取組みが推進されるようになりました(図16)。

課題もいくつかございます。まず、アフガニスタンの女子教育の現状に関する情報が圧倒的に不足しているということです。当初は、事前調査団を派遣したり、フォローアップ研修に行ったりして、直接情報を収集することができましたが、最近は、そのようなことは難しいのが実情です。とにかく、こちらからは行かれませんが、日本に来てくださる方、あるいは、あちらに住んでいる方、それらからJICAの方などから情報をいただいています。

アフガニスタンの状況は日々変化しておりますので、それを踏まえつつ、どのように女子教育の支援に取り組んでいくか? これからももう少し詰めて考えていかなければいけないだろうと思っています。

課 題

➤アフガニスタンの女子教育に関する情報の不足と収集の方法

- ・ 政策、カリキュラム、教科書、教員の能力、データ、実際の授業、生徒の状況等に
関する情報の不足⇒事前調査団、事前研修、アフガニスタン在住者、JICA
の専門家等を通じて情報収集
- ・ 日々変化するアフガニスタンにおける女子教育の取組みにどう対応するか？

➤地方への裨益の困難さ・限界

- ・ 地方における女子教育に否定的な考え(中央と地方の格差が大きい)
⇒地方における女性の適任者の人選の困難さ
- ・ 現地における裨益のための現地フォローアップ研修の実施
⇒治安の悪化から地方訪問が難しくなり、研修成果の地方展開が困難に

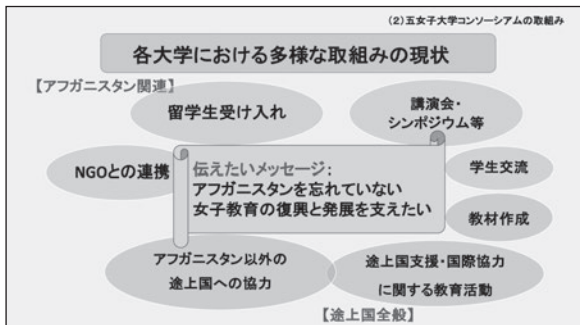
もう1点大きな課題として、地方への裨益の困難さということがございます。中央と地方の格差がとても大きく、研修の成果を地方に展開するということがなかなかできません。先ほどの高橋大使のご講演にもありましたとおり、女子教育に対して否定的な考え方を持っている方が地方ほど多く、日本に研修に来ていただく女性を選定するのもままならないという現実があります(図17)。

こういった困難も何らかの形で乗り越えていきたいと考えております。

(4) 各大学における取組みの現状(図18)

各大学の取組みといたしましては、アフガニスタンからの留学生の受け入れ、NGOとの連携に加えて、講演会・シンポジウム、学生交流などが挙げられます。さらに他の途上国も視野に入れた、教材開発や教育活動なども行われています。

こういった試みを通して、私たちがお伝えしたいことは、「アフガニスタンを忘れてはいません」「女子教育の復興と発展を私たちは支えたいのです」ということです。まだまだ難しい課題

図
18

2003年7月「開発途上国女子教育協力センター」を設置

「女子教育を通じての国際協力」を促進するための活動拠点として
アフガニスタンの女子教育支援を推進実施

国籍や年齢を問わず、女性たちの成長とその資質能力の開発を支援
することを使命とする

同時期に、文部科学省の要請を受け、「東南アジア諸国の乳幼児教育
システム構築」を開始 ⇒ 乳幼児保育支援と女子教育支援を統合
更に「西アフリカ諸国の乳幼児教育システム構築」を開始し、今に至る

2008年「グローバル協力センター」と改称

アフガニスタンをはじめとする、困難な状況にある開発途上国に対して
教育・研究における支援協力活動を継続

もございますが、折に触れて、様々な方法で、こういったメッセージをお伝え
していきたいと思っております。

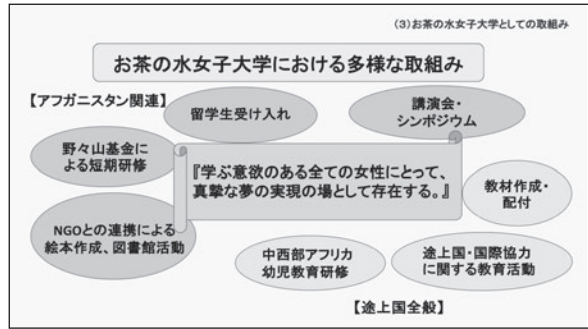
3. お茶の水女子大学としての取組み

ここでお茶の水女子大学としての取組みを簡単に紹介させていただきます。
本学は、「学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場として
存在する」とのミッションを掲げ、国籍や年齢を問わず、女性たちの成長とそ
の資質能力の開発を支援することを使命として活動が続けてまいりました。

(1) 開発途上国女子教育協力センターの設置 (図19)

アフガニスタンの女子教育支援を始めるにあたり、2003年7月に、女子
教育を通じて国際協力を促進するための活動拠点として「開発途上国女子教育
協力センター」を設置いたしました。

ちょうど同じ時期に、文部科学省から「東南アジア諸国の乳幼児教育システ
ム構築」の要請がありましたので、開発途上国女子教育協力センターは、「女
子教育協力研究部門」と「幼児教育協力研究部門」の2分野に分かれて活動し
ていくことになりました。幼児教育協力研究部門の活動には、その後さらに「西
アフリカ諸国の乳幼児教育システム構築」が加わりました。



開発途上国女子教育協力センターは、2008年に「グローバル協力センター」と名称を改め、アフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国に対して、本学の知見を活かした支援・協力を行う活動を継続しております。

(2) お茶の水女子大学における多様な取組み (図20)

◆ 留学生の受け入れ

本学は、学ぶ意欲のある全ての女性たちに学びの場を提供し、彼女たちに世界で活躍し、さらには次世代を育成していった欲しいと願っております。

先ほどここで、かわいらしい学生さんがプレゼンテーションをしてくださいましたが、アフガニスタンからも本当に素敵な女性たちが来て、がんばって学んでいます。先ほどのビデオに登場してくださった方々のように、卒業生たちは、帰国後、教育の現場をはじめ様々な分野で活躍しています。

◆ アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業 野々山基金

これは本学卒業生の故 野々山恵美子様からのご遺贈を原資として設立された基金です。2012年度から約10年間にわたり、①アフガニスタンの女性教員等の研修、②アフガニスタンにおける女子教育機関への図書寄贈、③学

(3) お茶の水女子大学としての取組み

ご寄附を活用した「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業 野々山基金」等による短期研修

2012年度～現在

- ・毎年、大学教員や公務員等2名を2週間招聘
- ・修士/博士課程修了者、留学生候補者含む

【内容】

- ・様々な研究テーマに関する研修
- ・図書への寄贈
- ・アフガニスタンの現状に関する報告会

帰国した留学生のブラッシュアップ
留学生候補者の事前研修
アフガニスタンの現状についての啓発活動



内での開発途上国の女子教育に関する調査・研究・情報発信に使わせていただくことになっています。

この基金を利用して、毎年、かつて本学の大学院で学んだ方や留学生候補者を含む2名の女性大学教員・女子大学生を約2週間お招きして、研修をしたり、図書をお持ち帰りいただいています。また、彼女たちからアフガニスタンの現状を聞かせていただく機会も設けておりますので、本学の学生や教職員への啓発にもなっていると思います（図21）。

また、本基金では、シャンティ国際ボランティア会（SVA）と連携しながら、図書館・絵本支援事業も行っています。これまでに、家族・友情・健康等をテーマとした絵本を作り、110の図書館・学校図書館に配布しました（図22）。

◆ 教材開発・配布（図23）

本学では、また、様々な教材の開発にも力を入れてまいりました。

(3) お茶の水女子大学としての取組み

「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業 野々山基金」による図書館・絵本支援事業

- シャンティ国際ボランティア会との連携
- 絵本作成・印刷（家族、友情、健康等に関する話）
2016年度は、「幸せの半分は健康から」を作成
- 110の図書館・学校図書室に配布




図書館で絵本を読む子どもたち

「幸せの半分は健康から」(2016年)



開発途上国では、女性や少女たちへの保健教育が徹底されていないために多くの問題が発生しているという現状がございます。そこで、5 年計画で「感染症」「人と体の仕組み」「食物と栄養」「水」「遺伝」をテーマとした絵本仕立ての教材を作りました。はじめは英語版とダリ語版を作り、アフガニスタンの研修生などにお配りしていたのですが、現在では、フランス語版、中国語版もできており、アフリカやアジアの途上国にも配布しています。

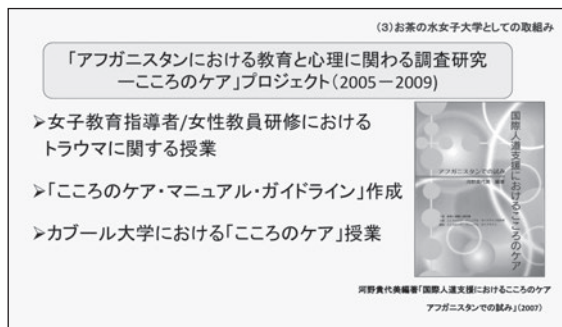
一方、アフガニスタンからの留学生の意見を取

り入れながら、理科教材の開発も行いました。他のリソースが使えない環境でも利用できるよう、教材キットとその使用法を説明したテキストがセットになっているところが特徴です。そのようなものが数種類ございます。

さらに、化学および生物化学専攻の留学生のために、実験室用語、略号などを収録した「漢・ダリ化学用語辞典」も作成しました。

◆ アフガニスタンにおける教育と心理に関わる調査研究 (図 24)

アフガニスタンには、紛争時のトラウマに苦し



講演会・シンポジウム等の開催

(3) お茶の水女子大学としての取組み

図
25

- 第1回アフガンフォーラム「アフガニスタンってどんな国」(2002)
- 第2回アフガンフォーラム「アフガニスタン女子教育支援に向けて」(2002)
- シンポジウム「来日専門家が語る～アフガニスタン教育の現状と今後」
- アフガニスタン女子教育支援シンポジウム(2002)
「教育と平和」(緒方貞子氏基調講演、五女子大学長による
パネルディスカッション)
- 講演会「アフガニスタンの最近の教育事情」(2003)
- 講演会「アフガニスタン女子教育支援と最近のカブール」(2003)
- 講演会「文明の十字路からみたアフガニスタン」(2003)
- 講演会「アフガニスタンの子どもとユニセフ」(2004)
- 講演会「JEN in アフガニスタン～女性と共に、人々と共に」(2004)



講演会・シンポジウム等の開催

(3) お茶の水女子大学としての取組み

図
26

- 開発途上国女子教育支援センター設立1周年記念シンポジウム(2005)
「開発途上国女子教育の今日と明日」(井上正幸氏、明石康氏、本田和子氏)
- 国際会議「人道支援における心のケア～カウンセリングと国際支援」(2006)
- 講演会「アフガニスタンにおける女性の状況について」(2007)
- 第1回アフガニスタン復興支援国際シンポジウム(2009)
「お母さんと子どものために～私たちができること」
- 第2回アフガニスタン復興支援国際シンポジウム(2010)
「アフガニスタン女子教育支援」
- 第3回アフガニスタン復興支援国際シンポジウム(2011)
「これからの女性・子どもへの支援」
- 第4回アフガニスタン復興支援国際シンポジウム(2012)
「ノンフォーマル教育の視点から」



む方が多くいらつしやいます。そこで「アフガニスタンにおける教育と心理に
関わる調査研究―こころのケア」プロジェクトを実施いたしました。女子教育
指導者／女子教員研修においてトラウマに関する授業を行ったり、英語版とダリ
語版のトラウマやPTSDのチェックリストが付いた「こころのケア・マニユア
ル・ガイドライン」を作成したりいたしました。さらに、本学の教員がカブール
大学に赴き、カウンセリングに関する講義を行いました。

◆ 講演会・シンポジウム (図25・26・27)

2002年以降、アフガニスタンや開発途上国の現
状や支援をテーマとする様々な講演会やシンポジウム
等を継続して開催しており、多くの方々が参加くだ
さっています。

中でも印象的だったのは、2002年のアフガニス
タン女子教育支援シンポジウムです。「教育と平和」
というテーマで、緒方貞子様に基調講演をしていただ
き、五女子大学の学長によるパネルディスカッション
を行いました。

2005年には、開発途上国女子教育支援センタ
ーの設立一周年を記念して、シンポジウム「開発途上国



女子教育の今日と明日」を開催しました。本日、基調講演をしてくださった井上正幸様をはじめ、明石康様、本田和子学長がご講演をされています。

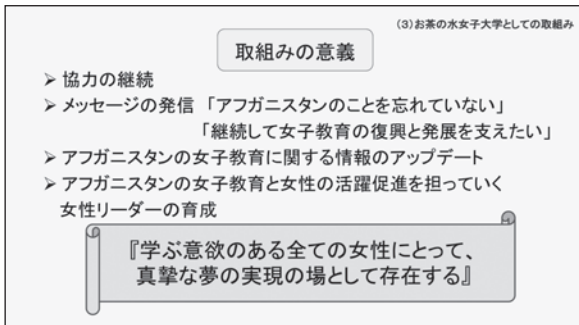
(3) お茶の水女子大学における取組みの意義 (図28)

今お話しいたしましたような教育支援や協力活動を15年間にわたり継続してきたことは、意義ある活動であったと思います。

こうした取組みを通して、私どもは、「アフガニスタンのことを忘れていない」「継続して女子教育の復興と発展を支えたい」というメッセージを発信し続けてきたつもりです。

そうすることにより、アフガニスタンの女子教育に関する情報をアップデートすることができましたので、必要に応じて、研修プログラム等を改善するということもしてまいりました。結果として、アフガニスタンの女子教育の再建と女性の活躍促進を担う女性リーダーの育成に多少なりとも貢献できたのではないかと考えております。もちろん、本学一大学だけで、これだけのことができるはずはなく、すべて五女子大学コンソー

図
28



国際社会を取り巻く課題と女子大学の役割

国際社会を取り巻く課題:

貧困問題、国内・国家間の格差、ジェンダーの不平等、少数者の排除(少数民族、障害者等)、紛争、環境問題等

(参考: 国連「持続可能な開発のための2030アジェンダ」(2015年国連総会で採択))

これらへの取組みにおいて、女性、少数者等に対する教育とリーダーシップの強化に取り組んできた女子大学が果たすべき役割は大きい
⇒ アフガニスタン女子教育の再建・発展と途上国における女子教育の発展に向けて、今後も活動を継続していきたい



シームとの協働や、文部科学省・外務省・JICA等のご支援によって実施されたものであったことを改めてお伝えし、ご関係の皆様にご心から感謝申し上げます。

4. 今後に向けて

今も世界では紛争が起きていますし、貧困、国内・国家間の格差、ジェンダー不平等、少数者の排除、環境問題など、国際社会を取り巻く面倒な課題が山積しています。そのような中であって、女性、少数者等に対する教育とリーダーシップの強化に取り組んできた歴史をもつ日本の女子大学の果たす役割は非常に大きいと思っております。これからも、私たちは、アフガニスタンの女性たちを、そして、開発途上国の様々な問題を抱えた女性たちを支援してまいりたいと思っております。

先ほども申し上げましたが、アフガニスタンの女子教育を支援する活動は、五女子大学の皆様の多大なるご尽力、それから文部科学省、外務省、JICA、教育委員会、協力してくださる他の大学等の方々のお力をお借りして、15年間続いてまいりました。今後も、アフガニスタン女子教育の再建・発展と途上国における女子教育の発展に向けて、活動を継続していきたいと思っております(図29)。

引き続き、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。
ご清聴ありがとうございました。

閉会挨拶

広瀬 晴子氏

お茶の水女子大学 理事



1968年東京大学卒業後、人事院採用。1988年同給与局参事官。1978年スタンフォード大学大学院留学、1981年同工学博士号取得。1982年経済企画庁経済研究所副主任研究官、1984年同主任研究官。1992年より2002年まで国際連合教育科学文化機関（UNESCO）に公募で採用され、パリに勤務。2002年から2006年まで国際連合工業開発機関（UNIDO）事務局次長兼プログラム調整・地域事業局長を歴任。2006年から2010年まで外務省在モロッコ特命全權大使。2013年より東京工業大学大学院グローバルリーダー教育院特任教授、2014年より日本モロッコ協会会長、2016年よりエスビー食品株式会社社外取締役。2017年より現職。

皆様、本日は長時間にわたりこのシンポジウムにご参加いただきまして、ありがとうございました。女子教育の重要性というのは、強調してもし過ぎるということはありません。タリバン政権が崩壊して、アフガニスタンが希望に満ちて再スタートした際、五女子大学がコンソーシアムを結成して、女子教育の支援に挑戦した。それが今日まで15年間続いたということは、素晴らしいと思います。

私は、この4月から理事としてお茶の水女子大学にまいりました。その前に、UNESCO（国連教育科学文化機関）やUNIDO（国連工業開発機関）などでアフガニスタンに関する仕事をしていたこともありましたが、日本の女子大学がこれほど地道にアフガニスタンの女子教育支援に取り組んできたという事実は、あまり知られていなかったように思います。これはもつと外にPRして良いことではないかと思います。

そうは言っても、アフガニスタン復興の道のりは平坦ではありませんし、女子教育を取り巻く環境は依然として厳しいものがあります。私もかつてUNESCOにいた頃、まずは女の子達に学校に来てもらうところからチャレンジである、という経験をいたしました。ですから五女子大学コンソーシアムの15年間の道のりも決して平坦ではなかったと理解しております。

先ほど、室伏学長より、本日、五女子大学コンソーシアム協定が更新されたとのこと報告がありました。これからもアフガニスタンを忘れない。けれどもそれだけでなく、他の地域の様々な困難に直面している女性たちにも支援の輪を広げていく、という意欲を示していただきました。これはなかなか大変なチャレンジだと思います。

さらに基調講演、特別講演では、新たな課題が提示されました。井上元国際統括官は「国境なき女子教育団たれ」とおっしゃられ、高橋大使は「アフガニスタンに女子大学を作ったらい。そのためには、男性を、宗教界を巻き込め」ということをおっしゃいました。どちらも難しい課題ではありますが、五女子大学の皆様は、女子大学ならではの粘り強さと忍耐をもって、試行錯誤を続けていく覚悟をお持ちのことと思います。

そのためには、日本政府、文部科学省、外務省、JICA等、色々な方面からのサポートが不可欠でございます。今日お集まりの皆様には、ぜひ今後とも、五女子大学コンソーシアムを応援してください、切にお願いしたいと思います。

今日は非常に中味の濃いお話をいろいろと伺うことができました。ご登壇いただいた皆様に心より御礼申し上げます。また、会場の皆様も長い間本当にありがとうございました。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

書 名	アフガニスタン女子教育支援 15 周年記念公開シンポジウム アフガニスタン女子教育：支援の歩みと現状
発行日	2018 年 3 月 29 日
編集・発行	国立大学法人 お茶の水女子大学 グローバル協力センター 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 TEL/FAX 03-5978-5546 E-mail info-cwed@cc.ocha.ac.jp URL http://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/
編集協力	特定非営利活動法人 お茶の水学術事業会

※本書の内容の全部または一部を、無断で複写・複製・転記することを禁じます。
ISBN978-4-9905741-5-4

ISBN978-4-9905741-5-4



お茶の水女子大学
Ochanomizu University